

# 西口遺跡発掘調査報告書 1

—個人住宅建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

2025

越谷市教育委員会



写真1 調査区域から元荒川を望む（南から）



写真2 調査区域全景（B区・DE区を合成・左が北）

# 序

埼玉県越谷市は、埼玉県の東南部にあり、東京都心から25km圏内に位置しています。市域の中央に元荒川、西に綾瀬川、東に古利根川などの一級河川が流れ、さらに葛西用水、八条用水など多くの用水もあり、水の景観が本市の大きな特長となっています。

このたび、個人住宅建設工事に先立ち、埋蔵文化財の有無を確認する試掘調査を実施したところ、遺跡の存在が明らかとなり、関係者からの多大なる理解と協力を得ながら、越谷市教育委員会で発掘調査を実施することができました。

発見された西口遺跡は元荒川右岸の自然堤防上に立地する、奈良時代から近世にかけての遺跡です。遺跡の近隣には天平勝宝2年（750年）に創建されたと伝わる真大山大聖寺が所在しています。

今回の発掘調査区とは異なる別の調査区からは奈良時代に属すると考えられる遺構・遺物が発見されています。その成果については今後、発掘調査報告書を刊行する予定となっていますが、このような歴史的背景のある土地から当該期の遺跡が発見されたことは大変意義深いことであり、西口遺跡と大聖寺との関係性を考慮せずにいられません。

本書は、これらの発掘調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護および普及・啓発の資料として、また、学術研究の基礎資料として広く活用していただければ幸いです。

結びに、発掘調査から本書の刊行にあたり特段のご理解とご協力を賜りました土地所有者様、地域の多くの方々、関係者の皆様に対し、深く感謝申し上げます。

令和7年3月

越谷市教育委員会

## 例　　言

- 1 本書は、埼玉県越谷市大成町一丁目に所在する西口遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 埼玉県埋蔵文化財包蔵地台帳における県遺跡番号と調査・整理時の略号は以下のとおりである。  
西口遺跡（No.78-002）、略号：西口
- 3 本調査は個人住宅建設に伴う事前記録保存のための発掘調査であり、越谷市教育委員会が調査主体者となり実施した。
- 4 発掘作業、整理等作業、報告書作成・刊行は第Ⅰ章2に示した組織により実施した。
- 5 発掘作業は以下の期間で実施した。
  - (1) A区：令和5年5月26日から令和5年6月7日まで
  - (2) B区：令和5年6月5日から令和5年6月14日まで
  - (3) C区：令和5年5月22日から令和5年5月30日まで
  - (4) D E区：令和5年6月16日から令和5年6月30日まで
- 6 整理等作業、報告書作成・刊行は発掘作業実施時から順次行い、令和7年3月31日まで実施した。
- 7 発掘作業、整理等作業、報告書作成・刊行は苑原が担当した。遺物の実測は鬼塚・安井・清水が、トレースは鬼塚が、遺構及び遺物の写真撮影は苑原が行った。
- 8 発掘作業に係る基準点測量・水準測量・平板測量（平面図作成）・空中写真撮影は株式会社中野技術が行った。
- 9 本書にかかる記録類及び出土遺物等は、越谷市教育委員会が保管している。
- 10 本報告書については、発掘調査成果の周知と活用又は学術研究、教育等を目的とする場合は、越谷市教育委員会の承諾なく無償で複製して利用できる。
- 11 発掘調査の実施にあたり、下記の方々から御教示、御協力を賜った。記して感謝申し上げる。
  - (1) 発掘作業参加者（敬称略、五十音順）  
越谷市教育委員会  
鬼塚千花　安井陽子  
越谷市シルバー人材センター  
井上幾央　近江谷隆　奥角　惇　木村　保　小松敏夫　酒井孝夫　添田武治　高岡資明  
高橋隆夫　高橋祐俊　中園金吾　八木誠一

(2) 整理等作業、報告書作成・刊行参加者（敬称略、五十音順）

越谷市教育委員会

鬼塚千花 清水典子 中谷真紀 安井陽子

12 本書の作成にあたり、下記の方々から御教示、御協力を賜った。記して感謝申し上げる。

（敬称略、五十音順）

鬼塚知典 小野 充 高崎光司 長島正弘 矢口孝悦 脇田克彦 脇田貴史 脇田真菜美  
脇田美智子

株式会社中野技術 株式会社プロシード 公益財団法人いきいき埼玉

公益社団法人越谷市シルバー人材センター 東部地区文化財担当者会 山崎建設株式会社

## 凡 例

- 1 本報告書におけるX・Yの数値は、世界測地系（新測地系）である。
- 2 各挿図に記した方位は、全て座標北を指す。
- 3 平面図や遺構断面図に記した水準数値は、海拔標高（単位m）を表す。
- 4 本書の本文・挿図・表・写真図版に記した遺構の略号は、以下のとおりである。なお、遺構一覧表の計測値はm単位とし、（）は残存値を示す。

S A … 柵列 S D … 溝跡 S K … 土坑 P … 小穴（ピット）

- 5 本報告書における遺構名は調査区で重複しないよう付した。
- 6 遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。
  - ・遺物計測値は大きさをcm、重さをg単位とした。
  - ・計測値の（）は残存値を示す。
- 7 土層観察と遺物における色調の判定は、X-rite社製マンセルソイルを使用すると共に、『新版標準土色帖』2008年版（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を併用した。
- 8 「主軸」は長軸を主軸とみなした。「主軸方向」は主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。（例 N-10°-E、N-10°-W）

# 目 次

卷頭図版

序

例言

凡例

目次（挿図目次・挿表目次・写真図版目次）

I	発掘調査の概要	1
1.	発掘調査に至る経過	1
2.	発掘作業、整理等作業、報告書作成・刊行の組織	3
	(1) 発掘作業	
	(2) 整理等作業及び報告書作成・刊行	
II	遺跡の立地と環境	4
1.	地理的環境	4
2.	歴史的環境	5
III	調査の方法と成果	7
1.	調査の概要	7
	(1) 埋蔵文化財包蔵地の設定	
	(2) 調査方法等の概要	
	(3) 調査成果の概要	
2.	基本層序	10
3.	遺構	11
4.	遺物	26
IV	総括	52
1.	発掘調査の成果について	52
2.	東方村字西口地引番号図との対比について	52

写真図版（遺構・遺物）

## 挿図目次

第1図 越谷市の位置	1
第2図 埼玉県の地形	4
第3図 越谷市の地形	6
第4図 調査区位置図	8
第5図 調査区設定図	9
第6図 土層柱状図	10
第7図 調査区全体図	14
第8図 A区全体図	15
第9図 B区全体図	16
第10図 C区全体図	17
第11図 DE区全体図	18
第12図 A区SA01遺構図	19
第13図 A区SK01・B区SK02・SK03・P04遺構図	20
第14図 B区SD01遺構図	21
第15図 B区SD02・P01～03遺構図	22
第16図 DE区SK04・SD03遺構図（1）	23
第17図 DE区SK04・SD03遺構図（2）	24
第18図 A区SA01出土遺物	30
第19図 A区SK01出土遺物（1）	31
第20図 A区SK01出土遺物（2）	32
第21図 A区SK01出土遺物（3）	33
第22図 A区SK01出土遺物（4）	34
第23図 A区SK01出土遺物（5）	35
第24図 A区SK01出土遺物（6）	36
第25図 A区SK01出土遺物（7）	37
第26図 A区SK01出土遺物（8）	38
第27図 A区SK01出土遺物（9）	39
第28図 A区SK01出土遺物（10）	40
第29図 A区SK01出土遺物（11）	41
第30図 A区遺構外出土遺物	42
第31図 B区SD01出土遺物	43
第32図 B区SD02・遺構外・C区遺構外出土遺物	44
第33図 DE区SK04出土遺物	45
第34図 DE区SD03・遺構外出土遺物	46
第35図 東方村字西口地引番号図	53
第36図 地引番号図と調査区全体図の合成図	53

## 挿表目次

第1表 市内遺跡一覧	6
第2表 遺構一覧表	25
第3表 遺物観察表（土器・陶磁器等）	47
第4表 遺物観察表（土製品等）	49
第5表 遺物観察表（石製品等）	50
第6表 遺物観察表（金属製品等）	50
第7表 遺物観察表（木製品）	51

## 写真図版目次

### 卷頭図版

- 写真1 調査区域から元荒川を望む（南から）  
写真2 調査区域全景（B区・DE区を合成・  
左が北）

### 写真図版1

- 写真3 A区全景（上が北）  
写真4 B区全景（上が北・SfMにて作成）

### 写真図版2

- 写真5 C区全景（南から）  
写真6 DE区全景（上が北・SfMにて作成）

### 写真図版3

- 写真7 A区SA01完掘状況（南から）  
写真8 A区SA01完掘状況（南西から）  
写真9 A区SA01完掘状況（南東から）  
写真10 A区SA01完掘状況（東から）  
写真11 A区SA01杭A検出状況（南から）  
写真12 A区SA01杭A土層断面（南から）  
写真13 A区SA01杭B土層断面（南から）  
写真14 A区SA01杭C土層断面（南から）

### 写真図版4

- 写真15 A区SA01杭D土層断面（南から）  
写真16 A区SA01杭E土層断面（南から）  
写真17 A区SA01杭F土層断面（南から）

- 写真18 A区SA01杭G土層断面（南から）  
写真19 A区SK01瓦（No.6）出土状況（西から）  
写真20 A区SK01完掘状況（西から）  
写真21 A区SK01側板（No.22～30）検出状況  
（南西から）  
写真22 A区SK01側板（No.26～32）検出状況  
（南西から）

### 写真図版5

- 写真23 B区調査区全景（南西から）  
写真24 B区調査区全景（南東から）  
写真25 B区SK02土層断面（南から）  
写真26 B区SK03土層断面（東から）  
写真27 B区SD01完掘状況（南から）  
写真28 B区SD01土層断面（南から）  
写真29 B区SD01完掘状況（南西から）  
写真30 B区SD01焰烙（No.62）出土状況（西  
から）

### 写真図版6

- 写真31 B区SD02完掘状況（北から）  
写真32 B区SD02完掘状況（東から）  
写真33 B区SD02杭痕跡検出状況（西から）  
写真34 B区SD02土層断面（西から）  
写真35 B区P01土層断面（南西から）

- 写真36 B区P02土層断面（南から）
- 写真37 B区P03土層断面（南から）
- 写真38 B区P04土層断面（東から）
- 写真図版7
- 写真39 C区調査区全景（南西から）
- 写真40 DE区調査区全景（東から）
- 写真41 DE区SD03完掘状況（北東から）
- 写真42 DE区SD03完掘状況（南から）
- 写真43 DE区SK04・SD03完掘状況（南西から）
- 写真44 DE区SD03完掘状況（北西から）
- 写真45 DE区SK04完掘状況（北東から）
- 写真46 DE区SK04・SD03土層断面（北から）
- 写真図版8
- 写真47 DE区SK04土層断面（東から）
- 写真48 DE区SK04木製品（No.83）出土状況  
(北から)
- 写真49 DE区SK04木製品（No.86・No.87）出土状況（南西から）
- 写真50 DE区SD03a-a'土層断面（北東から）
- 写真51 DE区SK04・SD03切り合部（北東から）
- 写真52 DE区SD03b-b'土層断面（南西から）
- 写真53 DE区SD03遺物（No.95～97・99）出土状況（東から）
- 写真54 DE区作業風景（北から）
- 写真図版9
- A区SA01出土遺物
- 写真図版10
- A区SK01出土遺物1
- 写真図版11
- A区SK01出土遺物2
- 写真図版12
- A区SK01出土遺物3
- 写真図版13
- A区SK01出土遺物4
- 写真図版14
- A区SK01出土遺物5
- 写真図版15
- A区SK01出土遺物6
- 写真図版16
- A区SK01出土遺物7
- 写真図版17
- A区SK01出土遺物8
- 写真図版18
- A区遺構外・B区SD01出土遺物
- 写真図版19
- B区SD01・SD02・遺構外・C区遺構外・DE区SD03出土遺物
- 写真図版20
- DE区SK04出土遺物
- 写真図版21
- DE区SD03・遺構外出土遺物
- 写真図版22
- 市指定文化財・承応2年庚申塔

# I 発掘調査の概要

## 1. 発掘調査に至る経過

越谷市（第1図）大成町一丁目に所在する西口遺跡は、奈良・平安時代の土師器や須恵器の表面採集をきっかけとして昭和47年に発見され、埼玉県教育委員会及び越谷市教育委員会では埋蔵文化財包蔵地として周知を行い、保護を図ってきた。

令和4年8月9日、本書で報告する範囲において個人住宅建設を見据えた埋蔵文化財存否照会が不動産会社より行われた。その時点で当該地は埋蔵文化財包蔵地ではなかったものの、埋蔵文化財包蔵地に隣接する土地であることから、照会者に対して試掘調査の実施について協力を求めたところ、関係者の理解と協力が得られたため、令和4年9月9日に教育委員会で試掘調査を実施することとなった。

試掘調査では2本のトレンチを設定した。当時2本のトレンチの間は電柱及び控えの支線があり、トレンチをつなげて掘ることができなかった（第5図）。調査の結果、地表面下約80cm～100cm下で平安時代・近世の遺物が出土し、溝・土坑等が検出された。

遺跡の存在が判明したため、越谷市教育委員会教育長名で令和4年9月16日付越教生第509号にて埼玉県埋蔵文化財包蔵地調査カード（変更増補）を埼玉県教育委員会教育長に提出し、本書で報告する範囲を含めるように埋蔵文化財包蔵地の範囲を拡大した。

範囲拡大を受けて改めて関係者と協議を行い、開発行為と埋蔵文化財保護の調整を進めたが、個人住宅建設の計画に変更はなく、また、住宅建設部分については地盤改良工事が必須であり、それにより埋蔵文化財が破壊されることも判明した。工事主体者からは次頁（2）アのとおり文化財保護法第93条の届出がそれぞれ出され、記録保存のための発掘調査を順次行った。

なお、当該地は市街化調整区域かつ農地に該当しており、農地を転用して自己用住宅を建築するためには農地法第5条の規定に基づき埼玉県知事の許可を得なければならず、また、農地転用の許可基準において申請者個人の事業実施の確実性や転用の必要性などを審査する必要があるため、分譲住宅に見える開発ではあるものの、あくまでも4件別々の個人住宅の建設である。よって、発掘調査の実施にあたっては国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金を活用している。

収録した発掘調査等に係る届出・通知等の法的手続きの概要は以下のとおりである。

### （1）遺跡台帳及び遺跡分布地図への変更増補

文化財保護法第95条第1項に基づく埋蔵文化財包蔵地の周知（調査カードの提出）

提出年月日・番号：令和4年9月16日付越教生第509号



第1図 越谷市の位置

(2) 発掘作業

ア. 文化財保護法第93条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の届出

調査区	届出者	届出年月日
A	堀切氏	令和5年4月7日
B	石原氏	令和5年4月7日
C	矢作氏	令和5年3月20日
DE	津布久氏	令和5年4月10日

イ. 上記通知に対する発掘調査実施の指示通知

調査区	通知者	通知年月日・番号
A	埼玉県教育委員会教育長	令和5年4月17日付教文資第4-105号
B	埼玉県教育委員会教育長	令和5年4月17日付教文資第4-106号
C	埼玉県教育委員会教育長	令和5年4月18日付教文資第4-36号
DE	埼玉県教育委員会教育長	令和5年4月17日付教文資第4-107号

ウ. 文化財保護法第99条に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知

調査区	通知者	通知年月日・番号
A	越谷市教育委員会教育長	令和5年5月18日付越教生第169-1号
B	越谷市教育委員会教育長	令和5年5月30日付越教生第169-2号
C	越谷市教育委員会教育長	令和5年5月8日付越教生第124号
DE	越谷市教育委員会教育長	令和5年6月7日付越教生第169-3号

エ. 埋蔵物の文化財認定通知（A区～DE区）※中核市のため

通知年月日・番号：令和5年7月3日付越教生第291-1号

オ. 埋蔵物発見届（A区～DE区）

通知年月日：令和5年7月3日

カ. 埋蔵文化財保管証（A区～DE区）

提出日・番号：令和5年7月3日付越教生第291-2号

## 2. 発掘作業、整理等作業、報告書作成・刊行の組織

### 調査主体者 越谷市教育委員会

#### (1) 発掘作業

令和5年度

教育長	吉田 茂	生涯学習課文化財担当主幹	菟原 雄大
教育総務部長	小泉 隆行	生涯学習課文化財担当主任	栗原 利峰
生涯学習課長	木村 和明	生涯学習課文化財担当主事	村田 琴音
生涯学習課副課長	北郷 裕司	越谷市市史専門委員	鬼塚 千花
生涯学習課文化財担当主幹(統括)	橋本 充史	越谷市市史専門委員	安井 陽子
生涯学習課文化財担当主幹	福田 博	越谷市市史専門委員	鈴木 健弥

#### (2) 整理等作業及び報告書作成・刊行

令和6年度

教育長（～12月31日まで）	吉田 茂	生涯学習課文化財担当主幹	菟原 雄大
教育総務部長	小泉 隆行	生涯学習課文化財担当主任	栗原 利峰
教育総務部副参事兼 生涯学習課長	川澄 大治	生涯学習課文化財担当主事	村田 琴音
生涯学習課副課長	北郷 裕司	越谷市市史専門委員	鬼塚 千花
生涯学習課文化財担当主幹(統括)	橋本 充史	越谷市市史専門委員	安井 陽子
生涯学習課文化財担当主幹	福田 博	越谷市市史専門委員	鈴木 健弥



令和5年6月27日調査参加者

## II 遺跡の立地と環境

### 1. 地理的環境

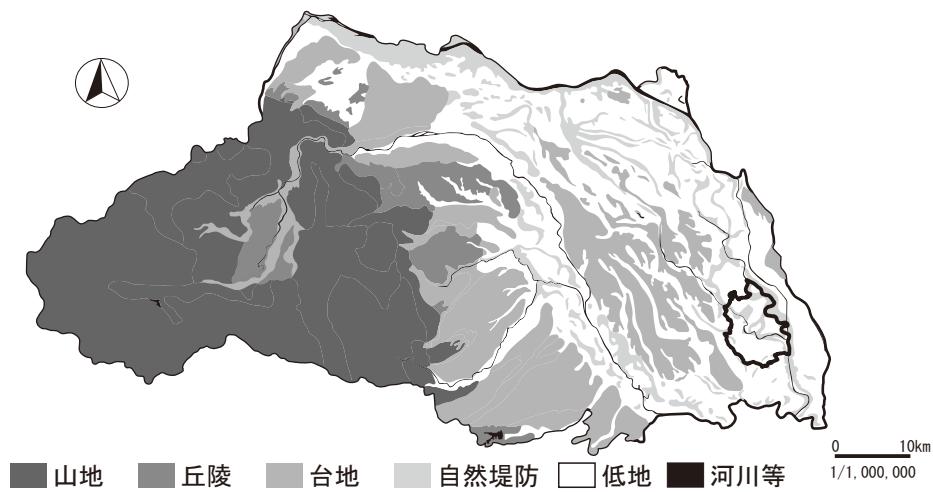
越谷市は埼玉県南東部に広く発達する中川低地のなかに位置している。中川低地は埼玉県西南部に分布する荒川低地と川口市南部で合流し、東京の下町低地に続いている。市域は元荒川・吉利根川・綾瀬川の顕著な曲流によって地形が形成され、その流域に沿って自然堤防の微高地が発達していることから、市域の土地形成にはこれらの河川が大きな役割をはたしていたことが分かる。

元荒川の曲流部分については近世に大きく2か所直線化がなされているが、元荒川・吉利根川の流路については比較的安定していたと考えられ、流路に沿ったかたちで自然堤防が発達している。これに比べて綾瀬川流域では自然堤防が散布しており、乱流して流路を変えていたことがうかがえる。

越谷市域の標高は北部で6m前後、南部で4m前後を示し、平均傾斜1,000分の0.4程度の非常にゆるい傾斜をしている。市域の地形としては自然堤防と後背低湿地との微地形が顕著であり、高度差1m前後のゆるい起伏が見られるにすぎない。また、市内には5か所の中川水系の河畔砂丘が発達し、南端の大相模河畔砂丘は県内における南限となっている。近年までは自然堤防の微高地に住宅が集まり集落が作られ、後背低湿地が水田として耕作されるという、地形に合わせた土地利用がなされていたが、現在では後背低湿地にも住宅等が建てられ、土地利用の様子が急激に変化している。

第3図は市域の地形に遺跡の位置を追加した図であるが、遺跡は全て自然堤防上に立地していることが分かる。調査の実施されていない遺跡がほとんどであるため、その範囲等が不明であるものの、遺跡は自然堤防の中心部というよりは、縁辺部に立地している場合が多いようである。なお、現状では元荒川由来の自然堤防上に遺跡が多く存在しているようであるが、市域には未発見の遺跡も多く存在している可能性もあるため、詳細な分布は不明と言わざるを得ない。

今回報告する西口遺跡は、元荒川右岸の自然堤防上に位置する。調査区域の北西側約300mには市内南端かつ県内の南限である大相模河畔砂丘が広がっているが、今回の調査区内では河畔砂丘に伴う風成砂は確認できていない。



## 2. 歴史的環境

越谷市域で現在のところ最古の遺跡は古墳時代前期の増林中妻遺跡である。増林中妻遺跡は表面採集により当該期の遺跡が存在するのではないかと言っていたところ、平成29年度に実施した試掘調査により竪穴住居1軒、溝7条、ピット1基が確認され、当該期の低地の遺跡として貴重な発見例となった。

古墳時代後期では見田方遺跡が知られている。見田方遺跡は昭和41年、昭和42年の2回にわたって発掘調査が行われており、竪穴住居が検出され、土器、土錘、紡錘車などが出土した。本遺跡も遺跡がほとんど無いとされていた中川低地における代表的な遺跡として評価されている。

その他、分布調査の成果として、草加・八潮遺跡確認調査団による昭和56年発行の『中川低地遺跡確認調査報告書』によれば、越谷市増林地内で縄文時代の遺物が、越谷市東越谷地内で弥生時代終末から古墳時代初頭の遺物が、越谷市大成町地内で古墳時代中期から後期の遺物が表面採集されている。

また、令和3年度に発掘調査が行われた越谷警察署前遺跡においても、原位置はとどめていないものの、弥生時代後期から古墳時代前期の土器細片が出土している。これらの成果を評価すれば、市域において弥生時代終末期から古墳時代にかけての遺跡が他にも複数存在する可能性があるといえる。

古代になると遺跡数が9遺跡に増える（第1表）。このうち発掘調査事例があるのは、大道遺跡・海道西遺跡・越谷警察署前遺跡である。大道遺跡は9世紀後半から10世紀前半～中葉頃の遺跡であり、遺構として竪穴住居・土師器焼成坑・土坑・溝などが確認され、武藏型甕や新治・南比企・上総・東海・猿投産及び下総や三和産と思われる須恵器が出土している。海道西遺跡は河畔砂丘上の遺跡であり、9世紀後半から10世紀初頭の竪穴住居跡・土坑などが確認されている。武藏型甕や、南比企・末野・東金子・新治・三和産と思われる須恵器が出土している。越谷警察署前遺跡では9世紀後半頃の土坑1基が確認され、武藏型甕や東金子産と思われる須恵器が出土している。

遺跡以外に目を向けると、西口遺跡から西へ約1kmの位置、元荒川右岸に真大山大聖寺が立地している。大聖寺はもと不動坊又は不動院と称し、寺伝によると天平勝宝2年（750）の創立、本尊は奈良東大寺の開山僧良弁が相模国大山で楓の大木から2体の不動明王像を彫刻した。そのうち根元の木で彫刻された1尺7寸の立像は大相模の不動院に納められ、一方この木の上方から彫刻した小さな像は大山の不動堂に納められた。よって埼玉郡の利根川・荒川の合流路、自然堤防上の不動堂に納められたこの地を大の相模、寺号は真の大山、つまり真大山と号したという。

大道遺跡近くの元荒川右岸には野島山淨山寺が立地している。淨山寺は寺伝によると、下野国都賀郡の豪族壬生氏の出であるとされる慈覚大師円仁が貞觀2年（860）に開基したとされている。本尊「木造地蔵菩薩立像」は、平安時代初期にあたる9世紀に作られた、関東でも屈指の非常に古い像であり、平成28年8月には国指定重要文化財となった。仏像の年代が、寺伝の開基年代及び大道遺跡・海道西遺跡における主体的な時期とも符合するため、周辺の歴史を考える上で示唆に富む発見であるといえる。

中世になると、市域の遺跡は3遺跡に減少する。ただし、市域に約130基存在している板碑の分布等から河川の自然堤防上に集落が展開していた状況が推測され、実際には未発見の遺跡が多数存在するものと考えられる。未報告であるが近年、大道遺跡からT字状を呈する火葬土坑や板碑が埋められた土坑、14世紀の遺物を含む大溝が確認されるなど、中世の営みが遺構としても確認され始めている。

本調査区の近接地には市指定文化財の承応2年（1653）庚申塔が存在し、庚申塔所有者は初代が元禄11年（1698）8月に没した清左衛門であるとされる旧家である。板碑型の文字供養塔で、高さ126cm、幅42cm、「承応二年神無月吉日奉供養庚申二世安樂処」との銘で、施主8人の名が刻まれている。



第3図 越谷市の地形

第1表 市内遺跡一覧

番号	県遺跡番号	遺跡名	時期
1	78-001	見田方遺跡	古墳後期
2	78-002	西口遺跡	奈良・平安・江戸
3	78-003	一番遺跡	室町・戦国・江戸
4	78-004	大相模次郎能高館跡	不明
5	78-005	会田出羽屋敷	江戸
6	欠番	—	—
7	78-007	清淨院開山塚	鎌倉
8	78-008	越ヶ谷御殿跡	南北朝・室町・戦国・江戸
9	78-009	No.9 遺跡	奈良・平安
10	78-010	蒲生の一里塚	江戸
11	78-011	大道第1 遺跡	奈良・平安・鎌倉・南北朝・室町・戦国・江戸
12	78-012	大道第2 遺跡	奈良・平安・鎌倉・南北朝・室町・戦国・江戸
13	78-013	No.13 遺跡	奈良・平安
14	78-014	No.14 遺跡	奈良・平安
15	78-015	No.15 遺跡	奈良・平安
16	78-016	越谷警察署前遺跡	奈良・平安・江戸
17	78-017	海道西遺跡	奈良・平安・江戸
18	78-018	増林下前遺跡	江戸
19	78-019	東方西口遺跡	室町・戦国・江戸
20	78-020	増林中妻遺跡	古墳前期
21	78-021	大沢宿餓鈍屋跡	江戸

## III 調査の方法と成果

### 1. 調査の概要

#### （1）埋蔵文化財包蔵地の設定

今回報告する調査区域（第4図）の東側隣接地は、令和3年度から先行して個人住宅の建設計画が本格化した。当該地についても西口遺跡に近く、遺跡が広がっている可能性があったため、個人住宅建設前に遺跡の有無確認のための試掘調査を打診した。その結果、関係者の理解と協力が得られたため、令和4年1月12日・13日の2日間で試掘調査を実施した。試掘調査地点は今回報告する調査地点よりも地形が50cmほど低く、試掘調査時点ではヨシと思われる植物が広がっていたが、かつては水田であった。トレーンチ配置図は第5図のとおりである。なお、B区・C区に不自然に張り出すように地形が落ちている部分は、おそらく人為的に抉られたものとみている。試掘調査の結果、遺構・遺物が一切確認できなかったため埋蔵文化財包蔵地として登録はせず、4棟の個人住宅が建設された。

その後、今回報告する調査区域の開発計画が本格化した。経過は第I章のとおりであるが、埋蔵文化財包蔵地の範囲は令和3年度の試掘調査地点を除外した範囲、つまり地形が低い部分を除外した範囲となっている（第4・5図）。B区・C区の住宅建設箇所を全て発掘調査対象としていないのは、元の地形が低く、埋蔵文化財包蔵地の範囲外としたためである。

#### （2）調査方法等の概要

今回の調査区域は土地の販売を見越して5区画の土地に分筆されており、便宜的にA区～E区と呼称されていた。発掘調査区も基本的にその名称を流用しているが、D区・E区については2区画で1軒の住宅が建つこととなったためDE区と呼称した。

宅地造成に伴う盛土及び旧表土（試掘調査時の表土）は重機により掘削を行い、人力掘削土と共に調査区域内に仮置きした。何れの調査区も湧水が著しく、水を除去しながらの検出作業となった。遺構検出は水分を含んだ粘土のため平滑にすることが難しく、検出段階で遺構の切り合いを確認することが困難だった。遺構掘削するとさらに湧水し、また、土層断面を確認しようにも水のために埋土の粘性が強くなり、掘削作業や壁立て作業は通常よりも困難を極め、面積に対して時間がかかる調査となった。

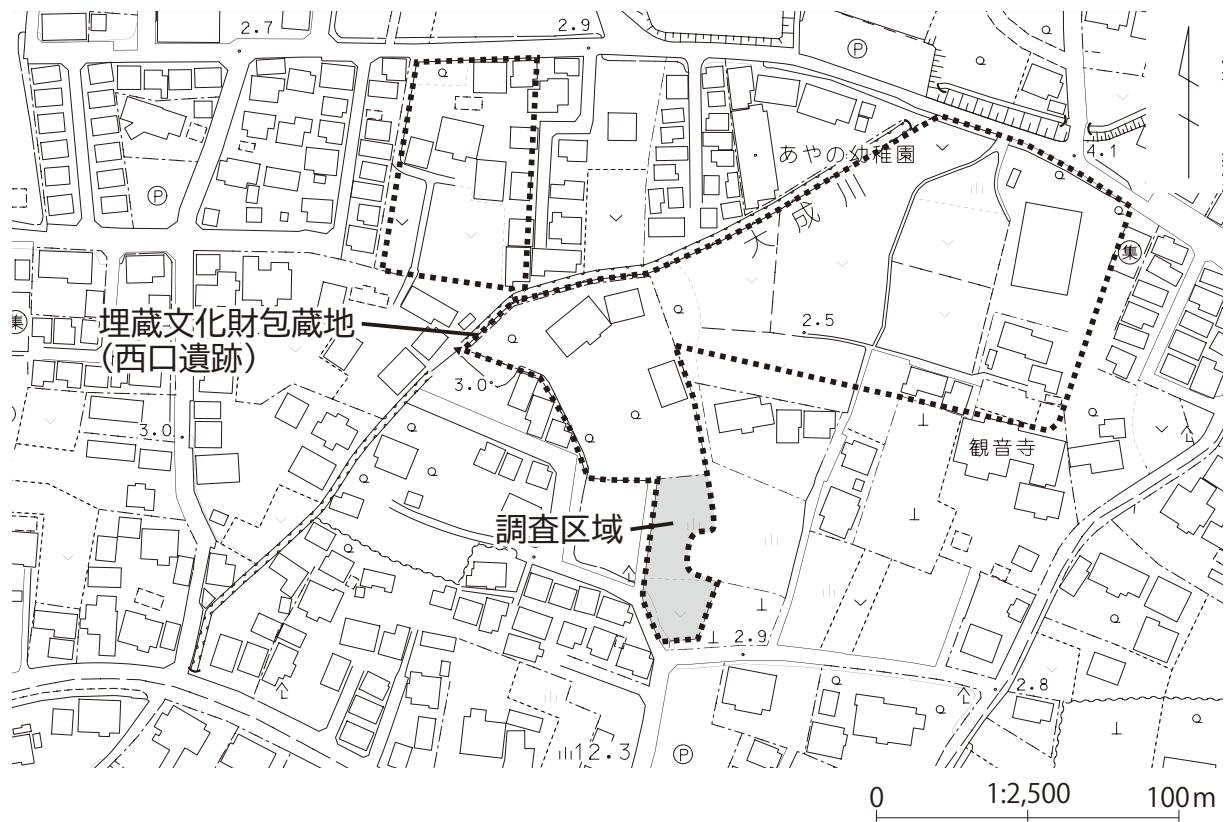
#### （3）調査成果の概要

A区（第8図）：杭や杭痕跡のあるもの7基で構成されるSA01を確認したほか、桶を据えた土坑1基（SK01）を確認した。遺構は遺物包含層下から確認されている。

B区（第9図）：溝2条・土坑2基・ピット4基を確認した。SD01は深い溝で、底面からの湧水が著しく、途中で掘削を中断している。SD02は浅く、溝の北側肩に杭とみられる痕跡が並ぶものである。土坑はほとんどの範囲が調査区外に延びると考えられ、詳細は不明。

C区（第10図）：遺構は確認できなかった。旧地形が落ちている部分とほぼ対応する位置に地形の落ちのラインを確認できた。また、DE区で検出した溝（SD03）がC区まで直線的に達しないことを明らかにでき、遺構が存在しないことが成果となった。

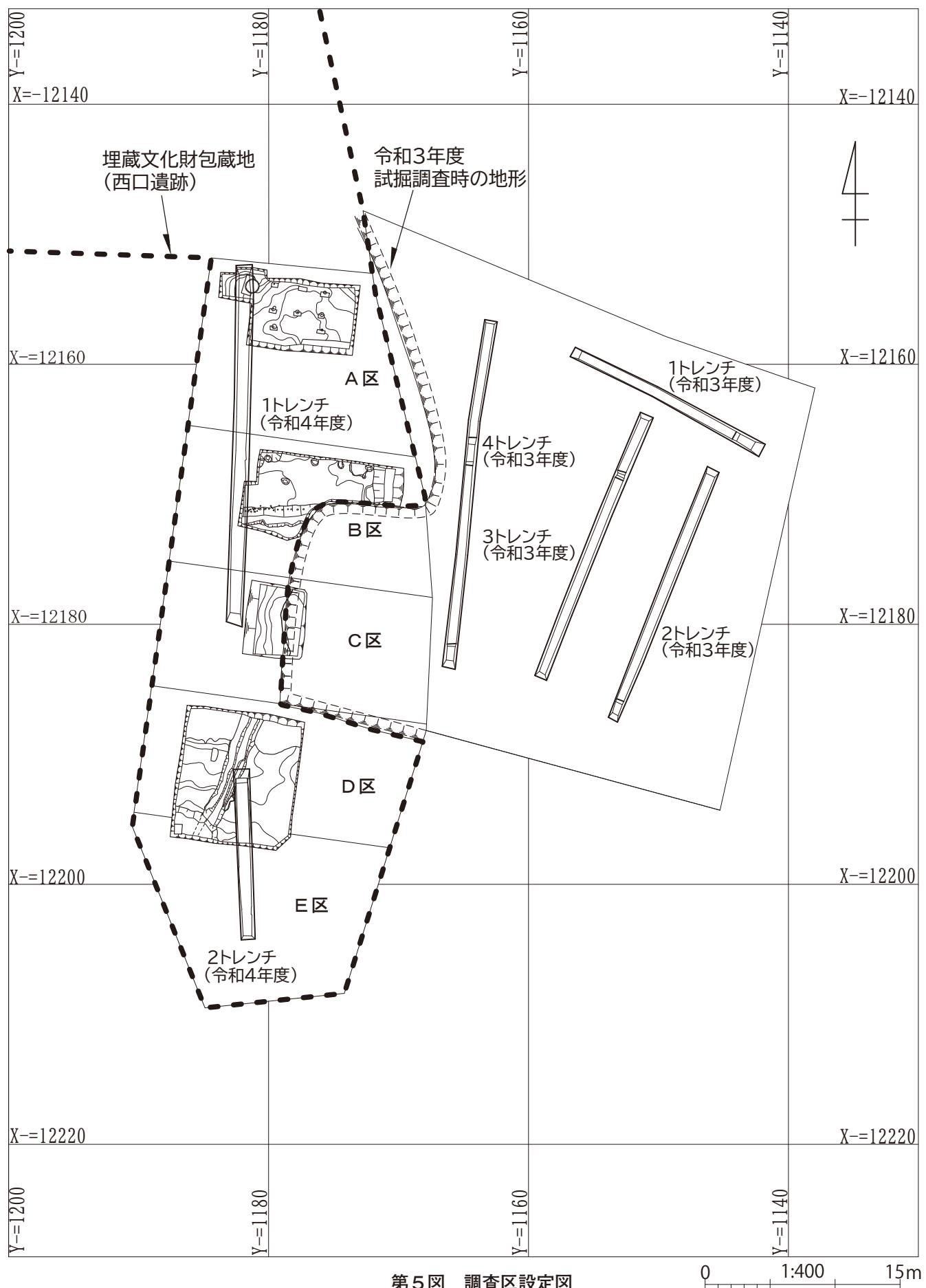
DE区（第11図）：溝1条（SD03）と土坑1基（SK04）を確認した。SK04埋没後にSD03が構築されている。SK04からは木製品が比較的多く出土した。



第4図 調査区位置図



令和3年度試掘調査地点（奥に見える小高い地形が今回報告する調査区域）

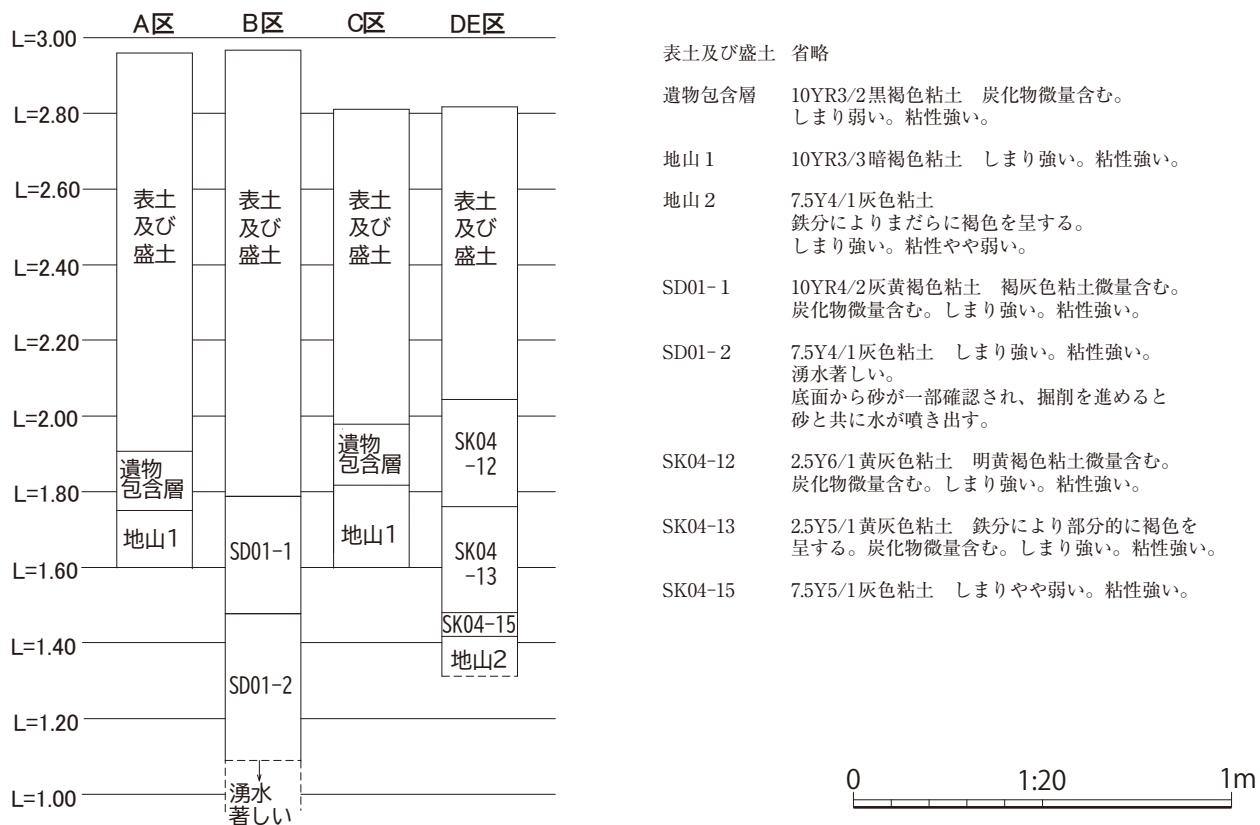


第5図 調査区設定図

## 2. 基本層序

本調査区の基本層序は以下のとおりである。柱状図は第6図を、柱状図の作成位置は第7図に記載している。

- ① 表土及び盛土層：調査時点での表土・令和4年の宅地造成に伴う盛土・宅地造成盛土がされる前の旧表土及び盛土を一括する。第6図では一括して表記してあるため、個別の土層注記は各遺構図を参照されたい。
- ② 遺物包含層：A区とC区で確認できる。厚さ約15cm。10YR3/2黒褐色粘土。しまり弱い。粘性強い。平安時代及び近世の遺物含む。A区では遺物包含層下の地山に遺構が構築される。
- ③ 地山1：10YR3/3暗褐色粘土。しまり強い。粘性強い。A区からDE区にわたって確認できる。
- ④ 地山2：SK04底面で確認される。7.5Y4/1灰色粘土。A区からC区でも地山1を掘り下げるとき地山2が確認されるかどうかは確認作業をしていないため不明。



第6図 土層柱状図

### 3. 遺構

#### (1) A区

##### SA01 (第8・12図)

調査区中央に位置する。4本の杭、2本の杭痕跡、不明痕跡1にて構成され、杭A～杭Gとして名称を付した。柵列としての略号を付したが性格は不明である。長軸（杭A～C間）3.81m、短軸（杭D～F間）2.91mを測る。杭先端までの深さは一定ではなく、最も浅い杭E、やや浅い杭A・D・F、深い杭B・C・Gにグループ分けできる。最も深い杭Cでは0.63mを測る。

木質が遺存していた杭A・B・C・Gにおいては、検出段階で木質又は木質痕跡の周りが暗オリーブ灰色砂を呈しており、当初、木質が暗オリーブ灰色砂を埋土とするピットに据えられていると考えた。しかし、木質と暗オリーブ灰色砂の関係を確認するため断ち割ったところ、ピット埋土と想定した暗オリーブ灰色砂がピット状になっておらず、下位にいくにつれ広がるような状況を示していること、木質の先端が先鋒であり、杭として打ち込むのにピットを掘り込む必要性が低いことから、木質周辺の暗オリーブ灰色砂は木質が土壤に対して何らかの反応を起こし、色調を変化させた可能性がある。

杭D・Fでは木質痕跡が確認された。木質痕跡は暗褐色シルトがブロック状に固まっており、その周辺を鉄分・マンガンが集積して硬化し、木質痕跡の周りをあたかも鉄錆が取り囲んでいるような状況であった。断ち割った断面を観察すると、木質痕跡の先端も先鋒になっていることから、杭A・B・C・Gと同様、本来は杭が打ち込まれていたとみて間違いない。杭痕跡の土質からみて、抜き取られたというよりは杭が腐朽してしまったと考えたい。杭Eでは杭D・Fと同様のブロック状に固まった暗褐色シルトが確認されたため断ち割りを行ったが、杭D・Fほど木質痕跡として明確ではなかった。これが杭だったのかは不明である。

杭EとDの間は複数回検出を行ったものの、本遺構に伴うような痕跡は検出できず、念のため中間地点を断ち割ったが、断面においても杭痕跡等は発見できなかった。よって、全体の平面形は杭Eを含んだH字状又は杭Eを含まないとすればユ字状を呈すると考えられる。ただし今回の調査区外にも延長している可能性があることから、平面形状および遺構の性格は、今後調査を行う機会があった場合の課題となる。

遺物包含層より下から検出されており、遺物包含層から焼継した磁器（53）が出土しているため、SA01は19世紀以前に属すると考えられる。

##### SK01 (第13図)

調査区北西に位置する。桶を据えた円形の土坑である。遺物包含層より下から検出された。試掘調査で既に検出しており、遺構西側を一部掘削している。試掘調査時点では瓦（9）と鉄錆（10・11）が出土している。桶底板は7枚の板目板で構成され、板同士は竹釘によって留められている。側板は一部腐朽しているが、少なくとも32枚以上で構成され、板の幅は腐朽にもよるが一定ではない。側板は最大で高さ36.7cm遺存している。外面に明確なタガは確認できなかったが、III-4で後述するとおり側板にタガ痕跡が認められるため、本来は存在していたと考えられる。土坑の規模は直径約1.0m、深さ0.44mである。埋土は2層に細分できる。

桶を取り上げた後に遺構を断ち割ったが、掘り方は明確に確認できなかった。おそらく桶とほぼ同じ

大きさで掘削した後に据えたと考えておく。ただし湧水が著しく、地山が粘土であることも相まって、断ち割り作業中に地山が緩んで乱れてしまい確認しきれなかった可能性もある。

遺物は試掘調査時点の出土遺物以外に陶器瓶（5）、瓦（6～8）、礫（12～18）が出土している。遺構の帰属時期は、出土遺物から19世紀代であると考えられる。

## （2）B区

### SK02・SK03・P04（第13図）

調査区北西に位置する。SK02がSK03を切る。遺構の大部分が調査区外に延びると思われ、平面形状は不明である。遺構の規模は調査できた範囲で、SK02が東西1.57m、南北0.74m、深さ0.46mを測る。SK03はa-a'断面も参考に規模を復元すると東西0.32m、南北1.50m、深さ0.34mを測る。P04はSK02掘削段階でSK02埋土を掘り込むプランとして認識できたものである。よって、3遺構の新旧関係はP04が最も新しい。P04の本来の深さは約0.40mを測ると思われるが、埋土を確認できたのは15cm分だけである。遺物はSK02から焙烙及び土師器杯が出土。SK03・P04からの遺物出土は無し。

### SD01（第14図）

調査区東端に位置する。主軸はN-3°-Eと概ね南北方向に延びると考えられるが、大部分が調査区外となり、西側肩は確認できたが、東側肩は調査区外となる。

遺構の規模は調査できた範囲で東西1.68m、南北2.80mを測る。検出面から掘削した深さは0.90mを測るが、遺構底面には達していない。盛土のためにかさ上げされた現況の地盤高から約1.8mの深さでも底面が確認できなかったこと、湧水のため埋土が流失し崩落の危険があるため、掘削を中断している。遺構の南側は旧地形が落ちており、埋蔵文化財包蔵地の範囲外としたことはⅢ-1で述べたとおりであるが、遺構の深さを勘案すれば、遺構は消失せずに遺存していると思われる。遺物はロクロ土師器、須恵器、焙烙、瀬戸美濃系陶器、砥石、板碑片等が出土している。

### SD02（第15図）

調査区南側に位置する。主軸はN-89°-Eと概ね東西方向に延びると考えられる。北側の肩が検出できたが、南側は調査区外に延びており、二段掘り状となるが、深さは最大でも16cmと非常に浅い。

遺構の東側は旧地形が落ちており、埋蔵文化財包蔵地の範囲外としたことはⅢ-1で述べたとおりであるが、遺構の深さを勘案すると東側は消失していると思われる。底面の標高は西側が1.70m、東側は断面図から復元すると1.80mであり、西側に向かって緩やかに傾斜している。

溝の北側肩には直径8cm程度の円形プランが27基認められ、確認できる範囲で約4.6mにわたってほぼ直線的に並ぶ。全てを断ち割ったところ、深さは最も浅いもので4cm、最も深いもので37cmを測る。深さは遺構検出時の人力剥ぎ取りの加減によっても変化するため一概には言えないが、10～20cmの範囲に収まるものが最も多い。溝に伴う杭痕跡とみておくが、確定できる根拠は得られなかった。

遺物は土師器、須恵器、近世陶磁器、瓦、砥石等が出土している。

### P01（第15図）

調査区中央西寄りに位置する。平面形状は楕円形で、長軸0.65m、短軸0.46m、深さ0.14mを測る。

埋土は単層で断面形状は浅い弧状を呈する。遺物は出土していない。

#### P02 (第15図)

調査区北側に位置し、調査区北壁外に延びる。平面形状は橢円形と思われ、検出した長軸0.55m、短軸0.45m、深さ0.14mを測る。埋土は単層で断面形状は浅い弧状を呈する。土師器壺及び陶器皿が出土。

#### P03 (第15図)

調査区北側に位置し、わずかに調査区北壁外に延びる。平面形状は不整円形で、長軸0.59m、短軸0.54m、深さ0.23mを測る。埋土は単層で断面形状は西側がやや緩く、東側の立ち上がりは急であり、底面は平坦である。遺物は瓦質土器と思われる細片が出土している。

### (3) C区 (第10図)

遺構は確認できなかった。旧地形が落ちている部分とほぼ対応する位置に地形の落ちのラインを確認できた。遺物は、遺物包含層から鉄滓（81）と地山上で軽石（82）が出土している。

### (4) DE区

#### SK04 (第16・17図)

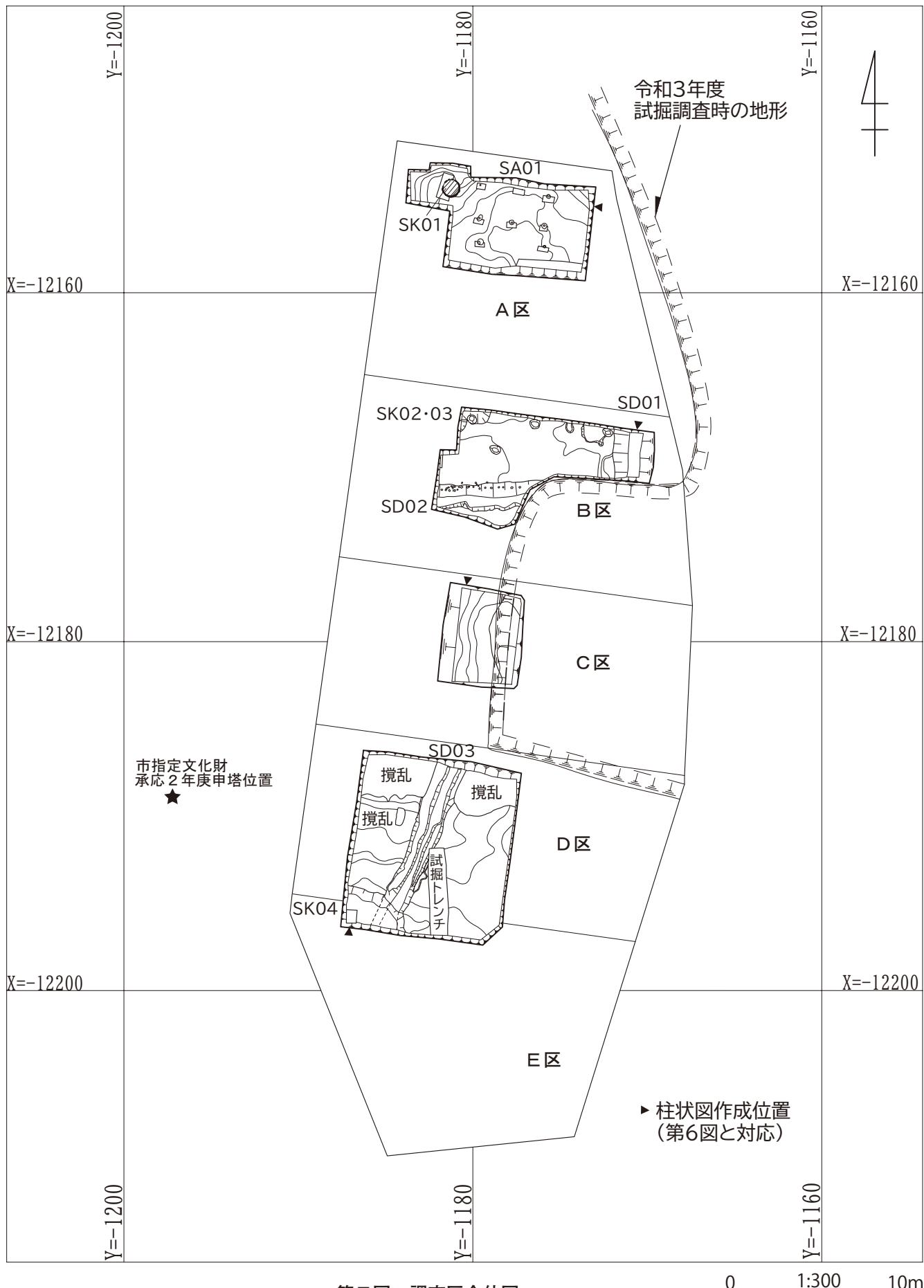
調査区南西隅に位置し、遺構の大半が調査区外に延びる大型の土坑と考えられる。規模は調査できた範囲で東西3.49m、南北1.93m、深さ0.68mを測る。検出時点では、SD03が屈曲していると考え掘削していたが、調査区南壁の分層をしたところ、直線的に調査区外へ延びるSD03とSK04が切りあっていることが判明した。c-c'断面を見るとSD03によって切られているため、SD03よりも古い。遺物は木製品（83～88）が出土している。

#### SD03 (第16・17図)

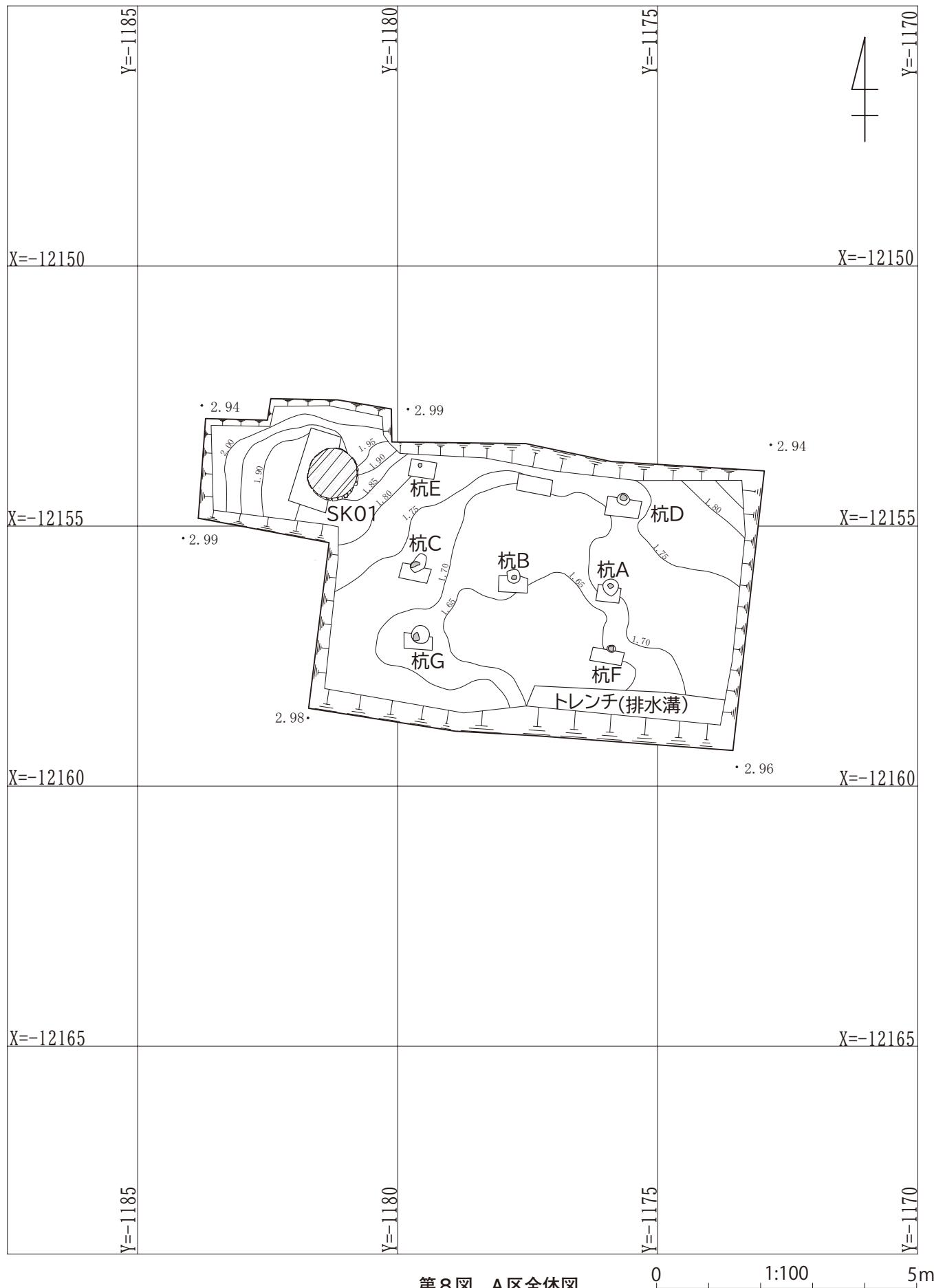
調査区中央を概ね南北方向に縦断するように延びる。主軸はN-23°-E。北側は調査区外に延びるもののがC区では確認できなかったため、急に収束するか屈曲すると考えられる。DE区の北東側は旧地形が落ちており、埋蔵文化財包蔵地の範囲外としたことはIII-1で述べたとおりであるが、もし東側に屈曲した場合には遺構の深さを勘案すると消失していると思われる。南側は調査区南西隅でSK04を切り、調査区外まで延びる。

a-a'断面から見た北側底面の標高は1.67m、d-d'断面から見た南端底面の標高は1.42mであり、南に向かって傾斜していることから、湧水の多い本調査区域においては南に水を排出する意図があった可能性が高い。またa-a'断面を見ると、検出時には認識できなかったが、1層が明らかに他の層を切っているため、埋没段階で一部掘り返しがあったと考えられる。ただし他の断面ではその痕跡が見られないことから、掘り返しは部分的なもの、又はa-a'断面に別遺構が掛かっていた可能性もある。何れにせよ、ほとんど埋没した段階で掘り返しているので、その時点では構築当初のSD03とは遺構の性格が大きく変わっていたと考えておく。

遺物は土師器、須恵器、近世陶磁器、瓦、板碑片、鉄製品、土塊等が出土している。

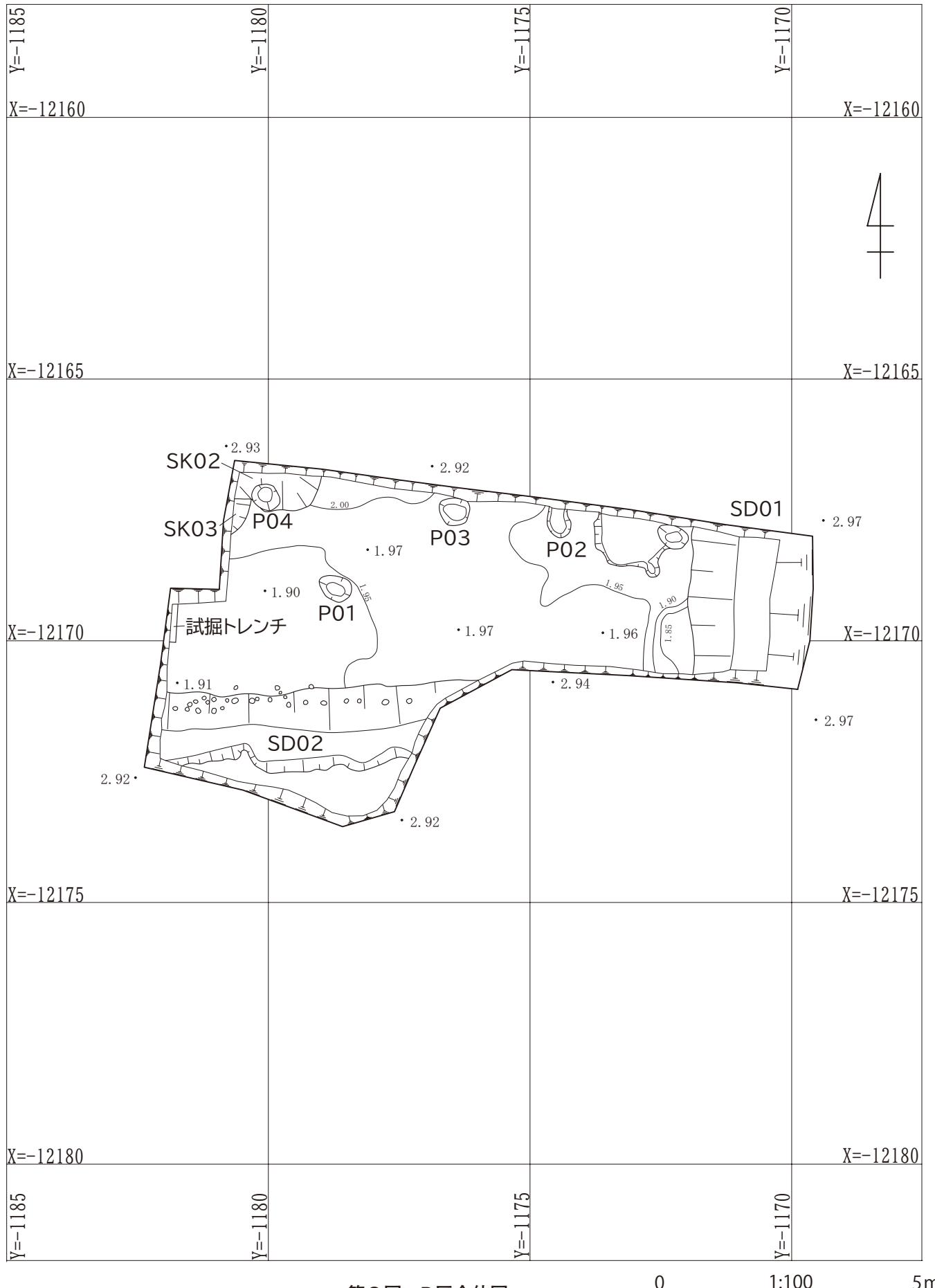


第7図 調査区全体図

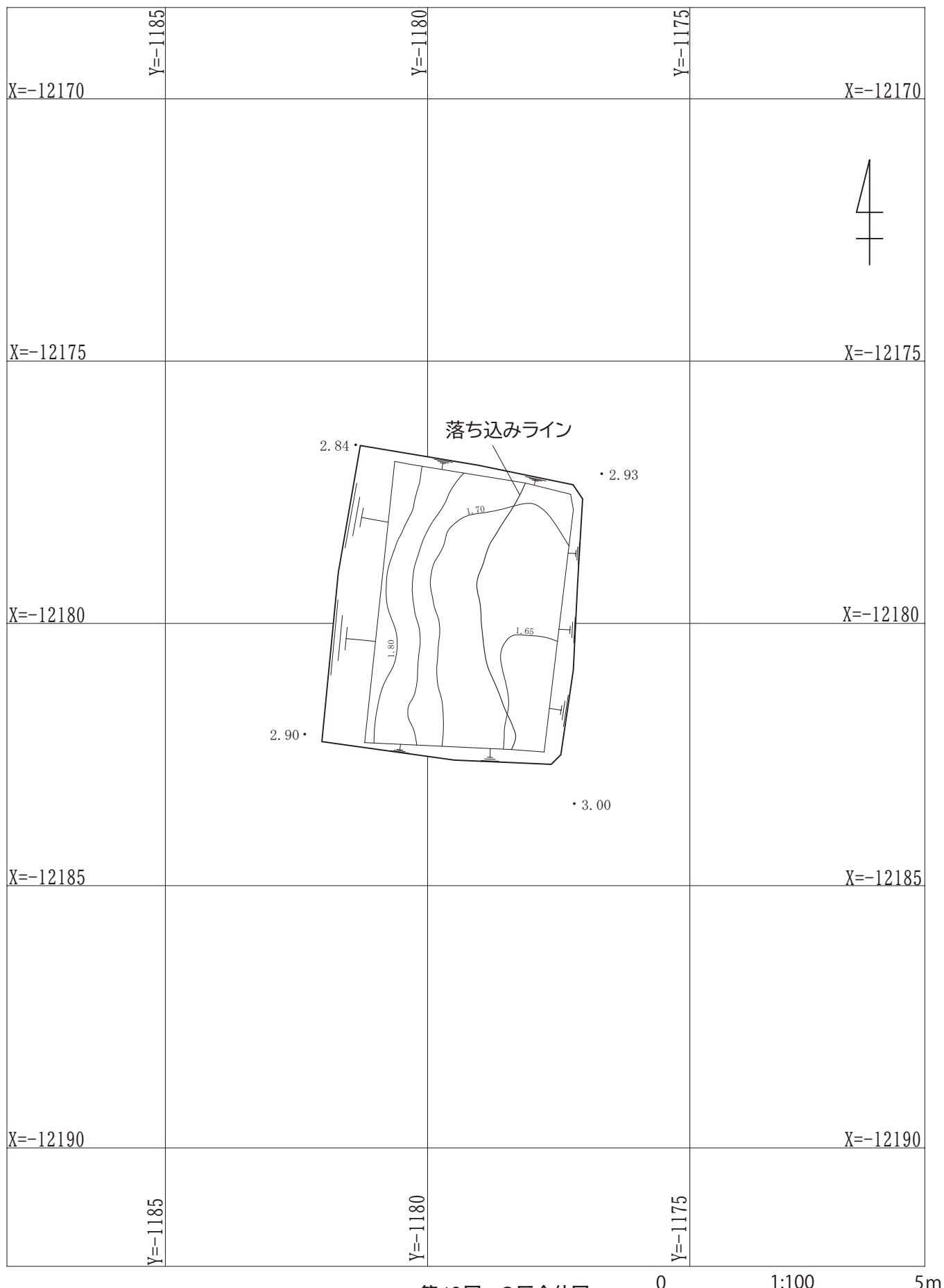


第8図 A区全体図

0 1:100 5m

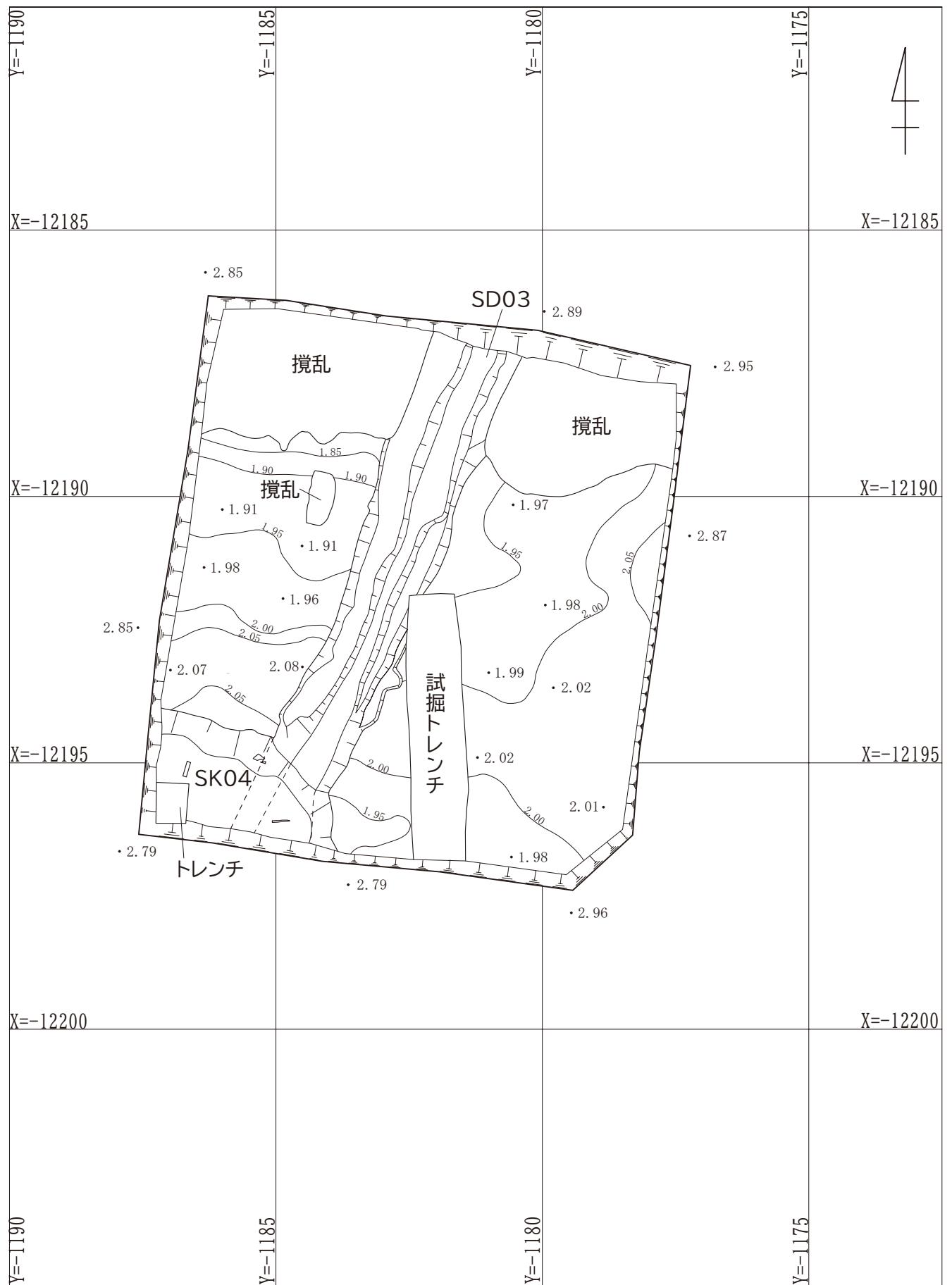


第9図 B区全体図



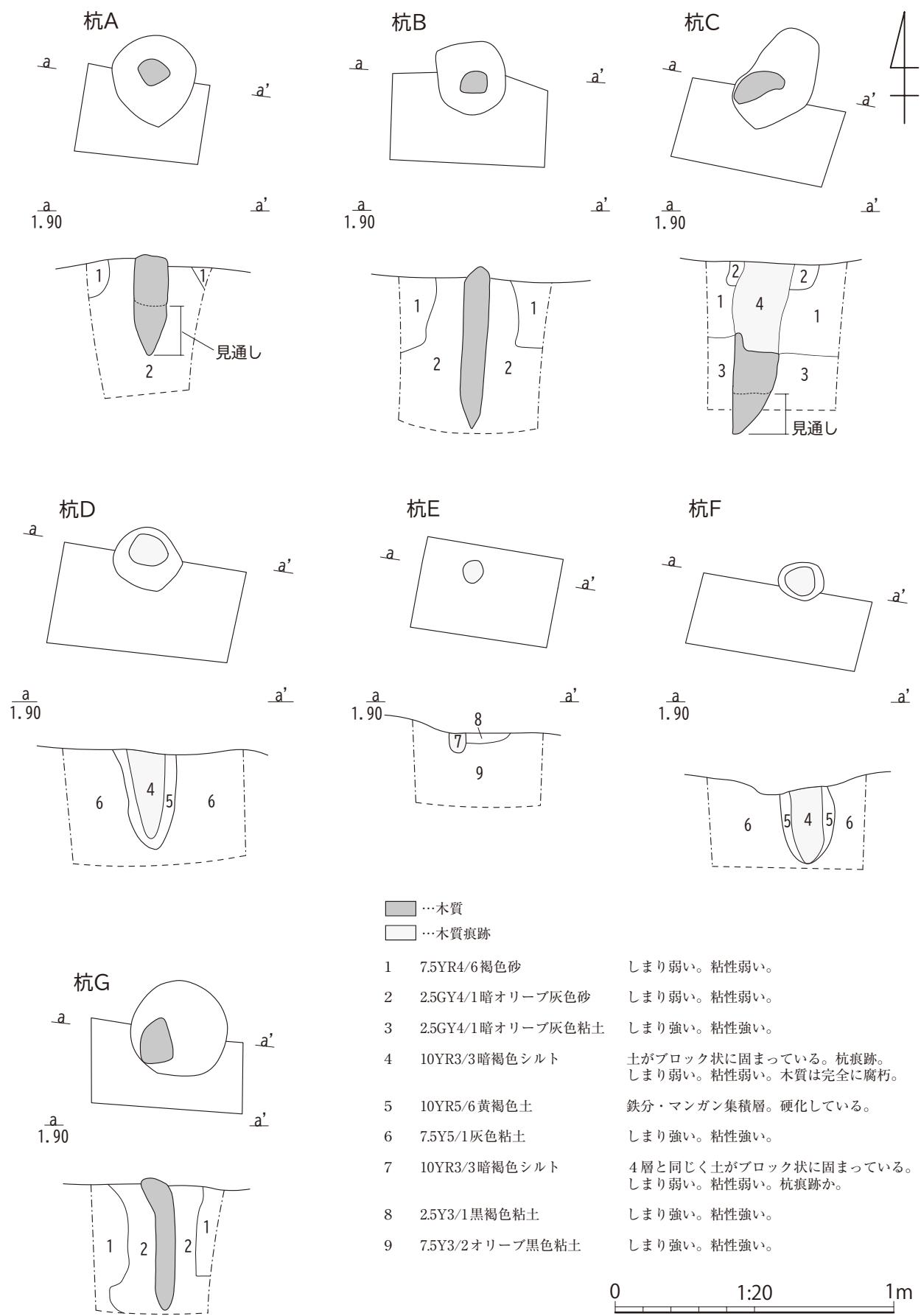
第10図 C区全体図

A horizontal scale bar for a 1:100 map. It features a central vertical tick mark with the text '1:100' above it. To the left is a small '0' and to the right is '5m'. Below the scale bar is a horizontal line with six small tick marks. The first five tick marks are evenly spaced, representing 1m each. The sixth tick mark is positioned such that the distance from the fifth tick to the '5m' label is also 1m, indicating a total length of 5m for the scale bar itself.

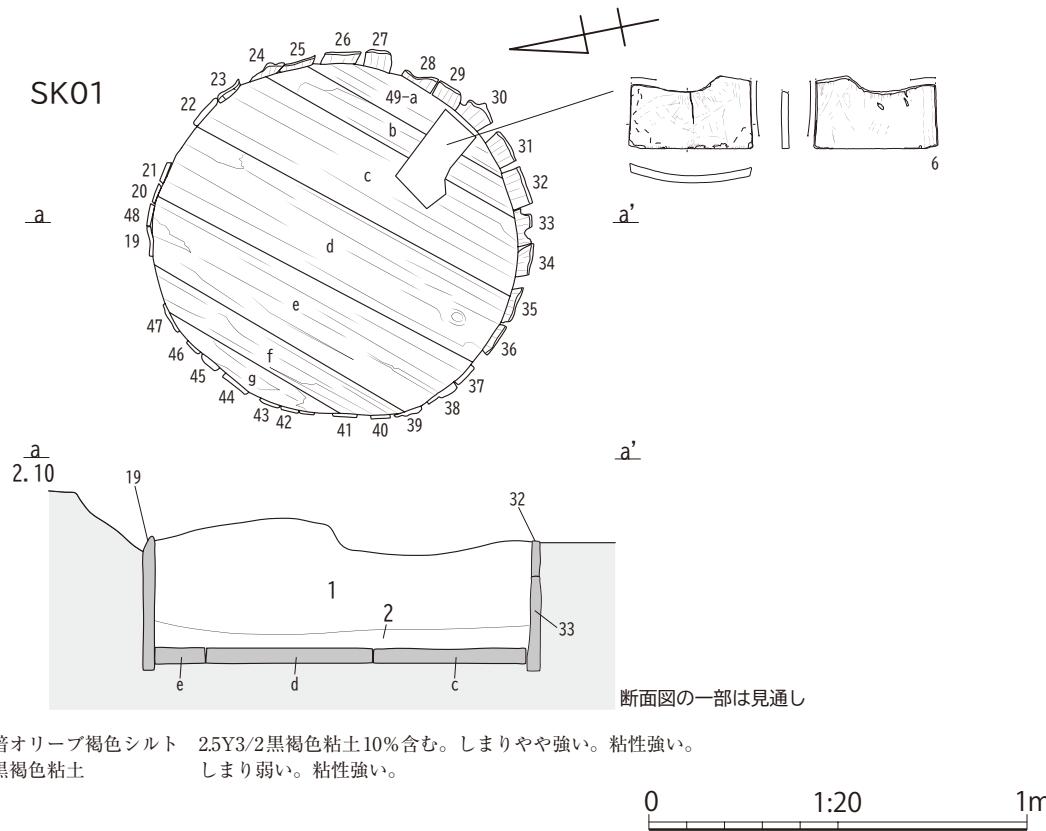


第11図 DE区全体図

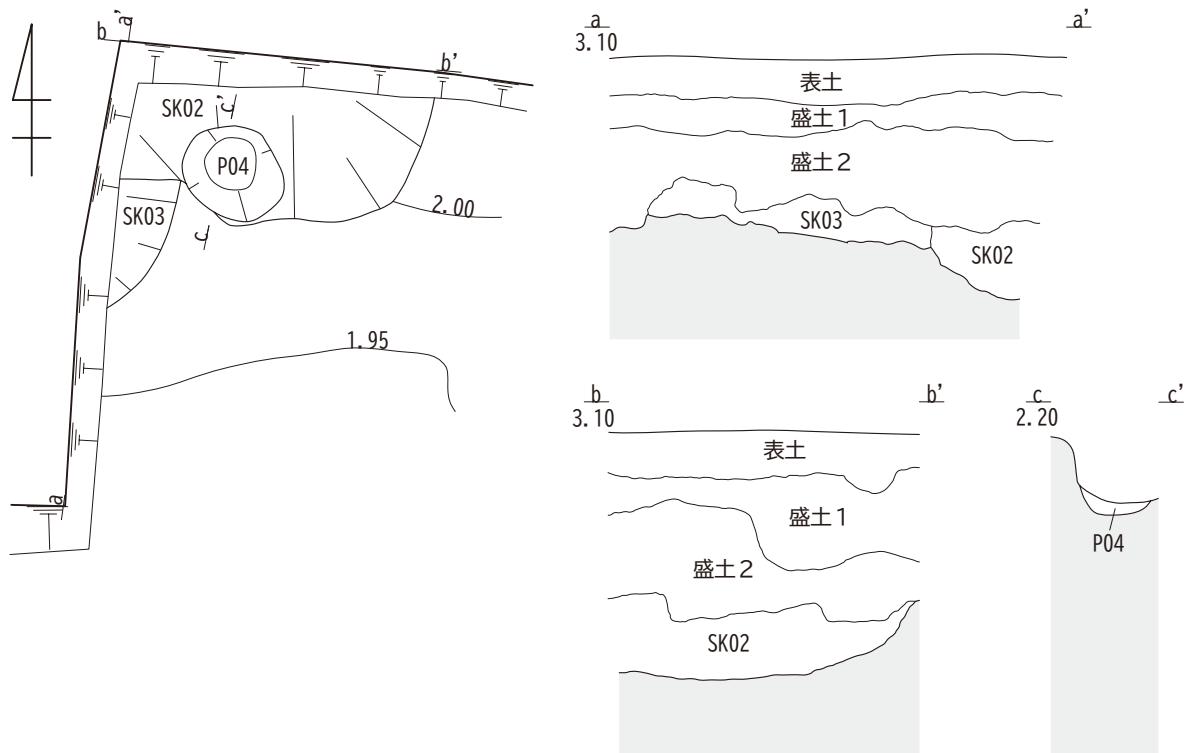
— 18 —



第12図 A区 SA01 遺構図

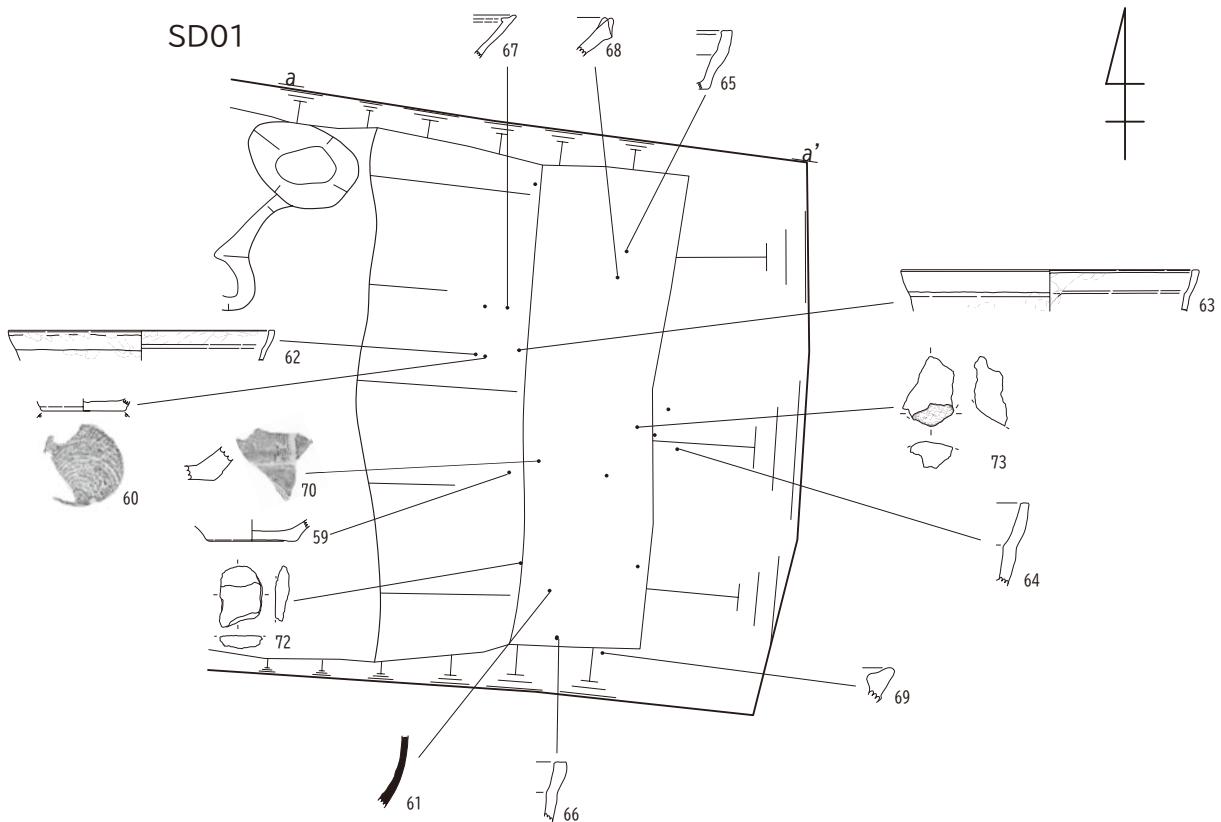


SK02・SK03・P04

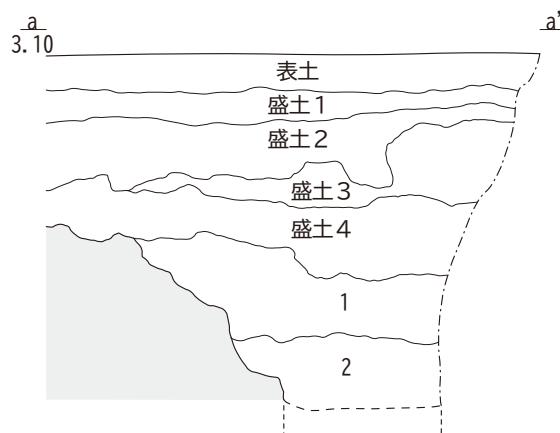


表土 7.5YR3/2黒褐色シルト 砂利多く含む。しまり弱い。粘性弱い。  
盛土1 7.5YR3/2黒褐色シルト 砂利含む。しまり強い。粘性弱い。宅地造成前からの盛土。  
盛土2 10YR3/3暗褐色シルト 炭化物微量含む。しまり強い。粘性弱い。宅地造成前からの盛土。  
SK02 7.5YR4/2灰褐色粘土 しまり強い。粘性強い。  
SK03 10YR3/1黒褐色粘土 しまり強い。粘性強い。  
P04 10YR3/2黒褐色粘土 しまり強い。粘性強い。

第13図 A区 SK01・B区 SK02・SK03・P04遺構図

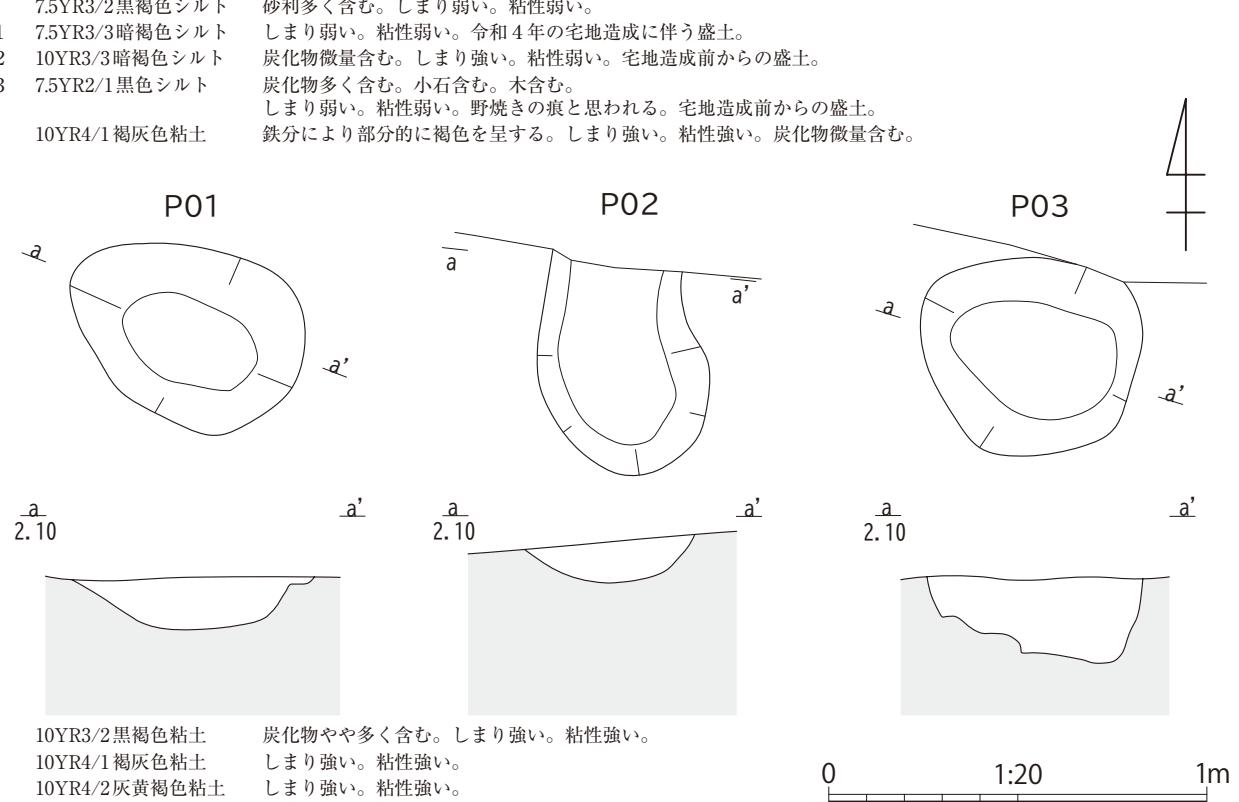
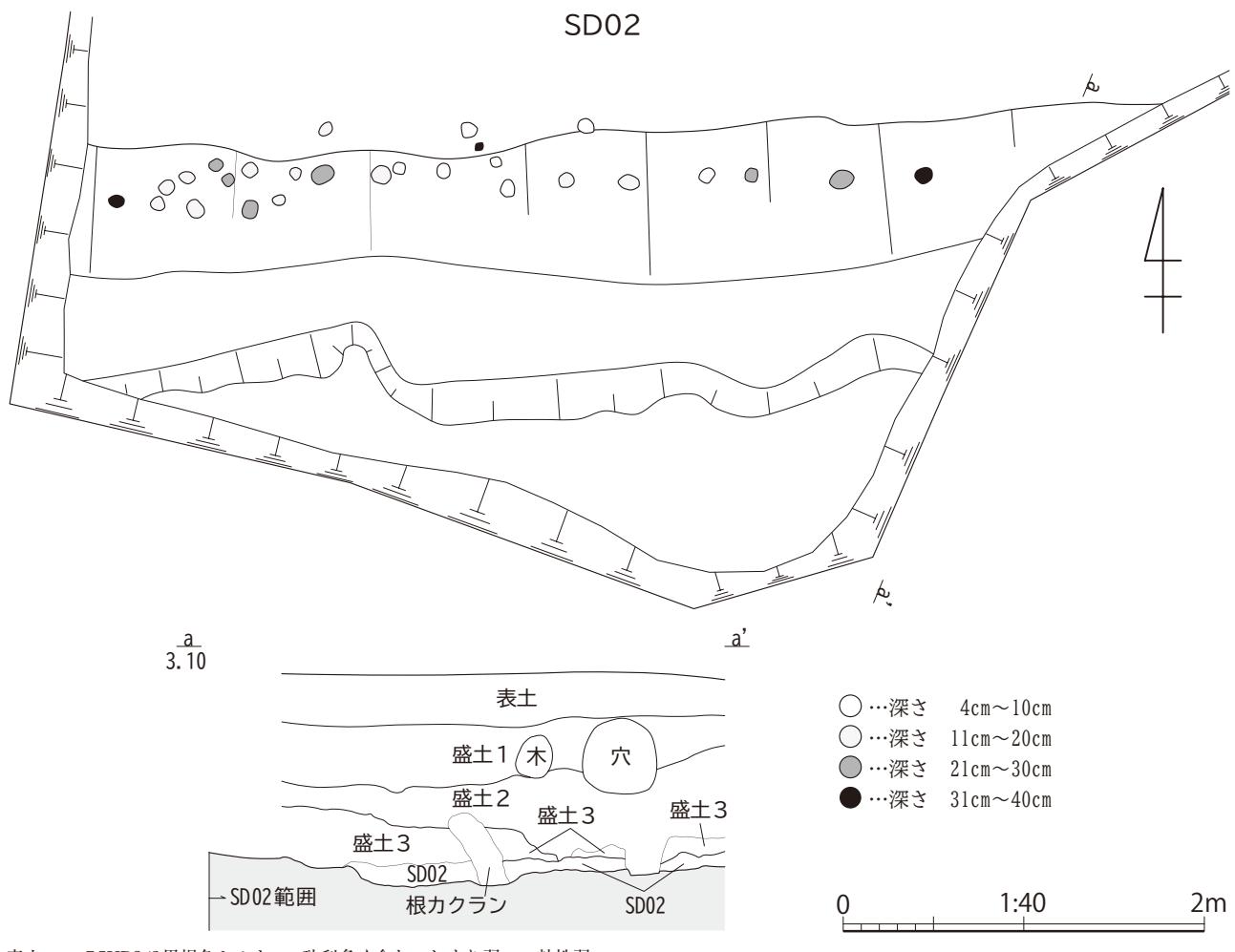


遺物番号	種別	器種	出土標高(m)
59	ロクロ土師器	壺	1.341
60	ロクロ土師器	壺	1.286
61	須恵器	甕	1.470
62	瓦質土器	焙烙	1.514
63	瓦質土器	焙烙	1.010
64	瓦質土器	焙烙	1.259
65	瓦質土器	焙烙	1.488
66	瓦質土器	焙烙	1.437
67	瓦質土器	鉢	1.198
68	陶器	片口鉢	1.647
69	陶器	鉢	1.888
70	陶器	擂鉢	1.538
72	板碑片		1.341
73	砥石		1.671



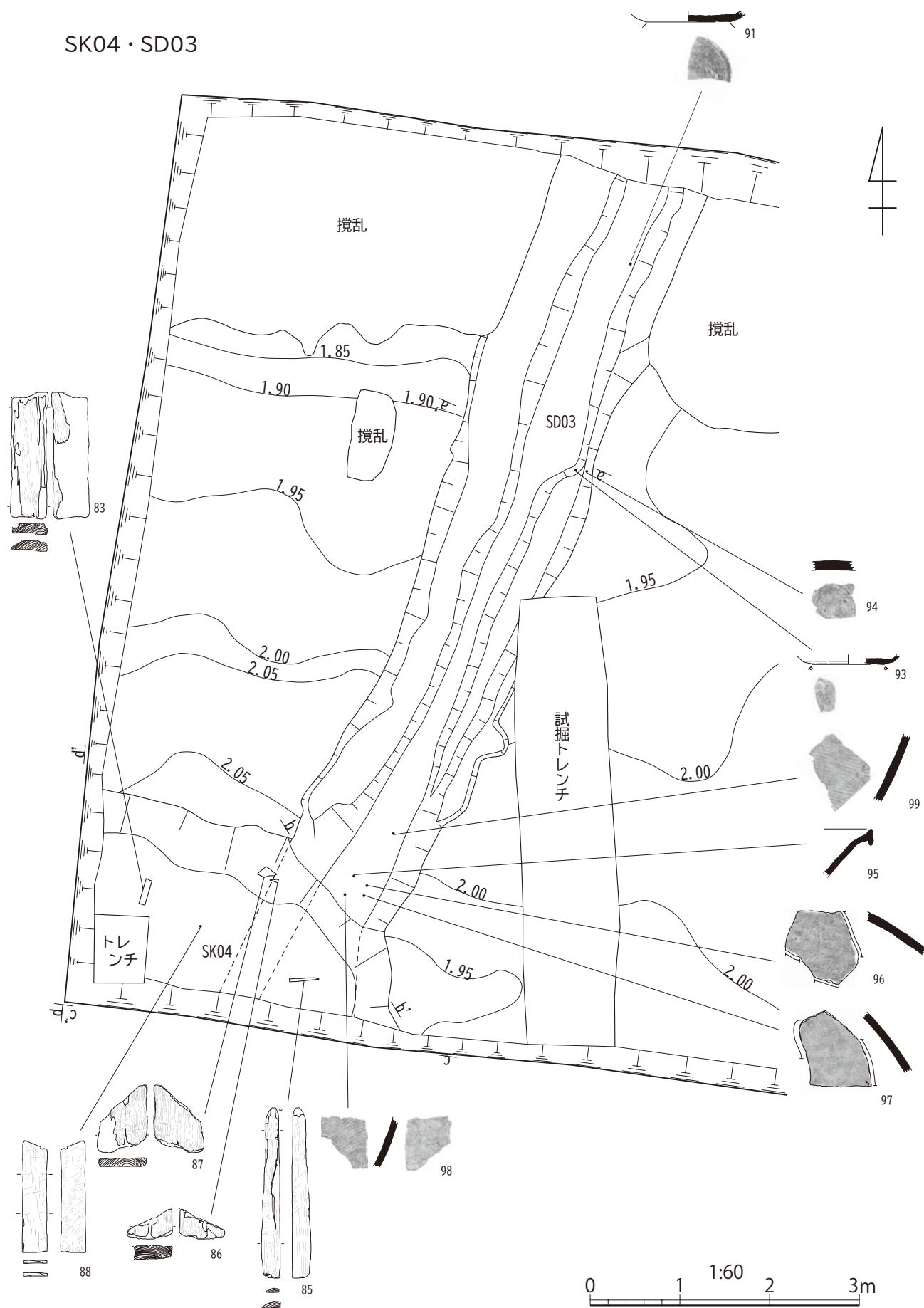
表土	7.5YR3/2 黒褐色シルト	砂利多く含む。しまり弱い。粘性弱い。
盛土1	7.5YR3/3 暗褐色シルト	しまり弱い。粘性弱い。令和4年の宅地造成に伴う盛土。
盛土2	2.5Y3/1 黒褐色粘土	木の根多い。しまり強い。粘性強い。宅地造成前からの盛土。
盛土3	10YR3/3 暗褐色粘土	しまり強い。粘性強い。宅地造成前からの盛土。
盛土4	10YR3/3 暗褐色シルト	炭化物微量含む。しまり強い。粘性弱い。宅地造成前からの盛土。
SD01 1	10YR4/2 灰黄褐色粘土	炭化物微量含む。褐灰色粘土微量含む。しまり強い。粘性強い。
2	7.5Y4/1 灰色粘土	しまり強い。粘性強い。湧水著しい。 底面から砂が一部確認され、掘削を進めると砂と共に水が噴き出す。 調査区壁を含め地盤が緩んで崩落する危険性があるため掘削を取り止め。

第14図 B区 SD01 遺構図



第15図 B区 SD02・P01～03遺構図

SK04・SD03



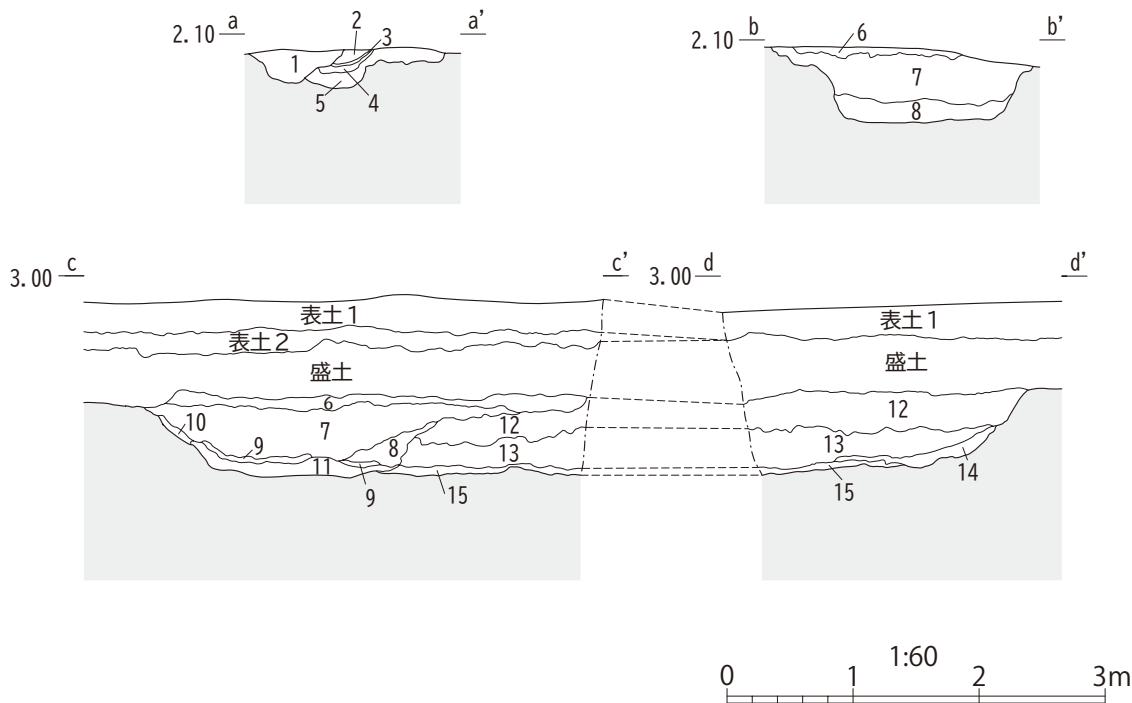
第16図 DE区 SK04・SD03遺構図 (1)

SD03

遺物番号	種別	器種	出土標高(m)
91	須恵器	壺	1.659
93	須恵器	壺	1.871
94	須恵器	壺	1.892
95	須恵器	甕	1.808
96	須恵器	甕	1.774
97	須恵器	甕	1.757
98	須恵器	甕	1.765
99	須恵器	甕	1.813

SK04

遺物番号	種類	出土標高(m)
83	板材	1.589
85	板材	1.447
86	板材	1.536
87	板材	1.578
88	板材	1.413



表土 1	10YR3/2 黒褐色シルト	小石多く含む。しまり強い。粘性弱い。令和4年の宅地造成に伴う盛土。
表土 2	10YR3/3 暗褐色シルト	小石含まない。しまり強い。粘性弱い。宅地造成前からの盛土。
盛土	10YR4/3 にぶい黄褐色シルト	炭化物含む。木の根多く入る。しまり強い。粘性弱い。
SD03	1 10YR3/2 黒褐色粘土	しまり強い。粘性強い。
	2 7.5YR4/2 灰褐色粘土	しまり強い。粘性強い。
	3 10YR5/2 灰黄褐色粘土	しまり強い。粘性強い。
	4 10YR3/2 黒褐色粘土	しまり強い。粘性強い。
	5 10YR4/2 灰黄褐色粘土	炭化物微量含む。しまり強い。粘性強い。
	6 10YR4/1 褐灰色粘土	鉄分により部分的に褐色を呈する。しまり強い。粘性強い。
	7 10YR4/2 灰黄褐色粘土	炭化物微量含む。しまりやや弱い。粘性強い。
	8 10YR4/1 褐灰色粘土	炭化物やや多く含む。しまり強い。粘性強い。
	9 10YR5/6 黄褐色土	鉄分・マンガン集積層。
	10 10YR4/1 褐灰色粘土	11層より硬く粘性弱い。しまり強い。粘性強い。
	11 10YR4/1 褐灰色粘土	混じりのない単一層。しまり強い。粘性強い。
SK04	12 2.5Y6/1 黄灰色粘土	炭化物微量含む。明黄褐色粘土微量含む。しまり強い。粘性強い。
	13 2.5Y5/1 黄灰色粘土	炭化物微量含む。鉄分により部分的に褐色を呈する。しまり強い。粘性強い。
	14 2.5Y4/1 黄灰色粘土	炭化物微量含む。鉄分により部分的に褐色を呈する。しまり強い。粘性強い。
	15 7.5Y5/1 灰色粘土	しまりやや弱い。粘性強い。

第17図 DE区 SK04・SD03遺構図 (2)

第2表 遺構一覧表

調査区	遺構名	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	平面形	主軸方向	遺 物	備 考
A区	SA01	3.81	2.91	最大 0.63	H字状 又は 工字状	—	木杭	木杭が残るものと、木杭痕跡が残るものに分かれる。
A区	SK01	1.00	1.00	0.44	円形	—	瓦質土器(焙烙)、陶器(瓶)、 瓦、鉄製品(鎌)、石製品(砥石・礫)、木製品(桶)、鉄滓	試掘調査時点で検出し、西側は掘削済み。
B区	SK02	(1.57)	(0.74)	0.46	不明	—	土師器細片、須恵器(甕)	SK03を切る。P04に切られる。調査区外に延びる。
B区	SK03	(1.50)	(0.32)	0.34	不明	—	—	SK02・P04に切られる。調査区外に延びる。
B区	SD01	(2.80)	(1.68)	0.90 以上	直線	N - 3° - E	土師器(坏)、須恵器(坏・甕)、土師質土器(坏、擂鉢)、 瓦質土器(焙烙)、陶器(擂鉢・鉢)、石製品(板碑・砥石・礫)	調査区外に延びる。 安全確保のため底面まで完掘できていない。
B区	SD02	(5.95)	(2.47)	0.16	直線	N - 89° - E	須恵器(坏・甕)、陶器(鉢)、 瓦、石製品(砥石・礫)、骨片	調査区外に延びる。 杭痕跡を伴う。
B区	P01	0.65	0.46	0.14	楕円形	N - 65° - W	—	—
B区	P02	(0.55)	(0.45)	0.14	楕円形?	N - 6° - W	土師器(坏)、陶器(皿)	調査区外に延びる。
B区	P03	0.59	0.54	0.23	不整円形	N - 69° - W	瓦質土器細片	—
B区	P04	(0.53)	(0.47)	(0.40)	円形	N - 31° - W	—	SK02・SK03を切る。
DE区	SK04	(3.49)	(1.93)	0.68	円形?	—	木製品(板状・棒状)	SD03として掘削していた部分があり、SD03の遺物が混入している可能性がある。
DE区	SD03	(9.96)	(1.65)	0.64	直線	N - 23° - E	土師器(坏・甕)、須恵器(坏・甕)、瓦質土器(焙烙)、陶器(片口鉢)、磁器(盃)、瓦、石製品(板碑片)、鉄製品(刃物)、土塊、骨片	DE区においては直線だが、 B区・C区で確認できないため、屈曲する可能性がある。

## 4. 遺物

### (1) A区

#### SA01 杭A (第18図)

1は丸材の木杭である。木取りは芯持ち材。杭先は7方向から中心に向けて削り出し、先端部では5面の平坦面を作り出している。上部は欠損し、杭先端部は摩耗し丸みを帯びている。残存する長さは36.3cm、幅12.3cm、厚さ9.3cm、杭先の長さは20.5cmである。

#### SA01 杭B (第18図)

2は丸材の木杭である。木取りは芯持ち材。杭先は少なくとも6方向から中心に向かって削り出し、工具の痕跡が残る。上部及び杭先端部は欠損し、一部表皮の残存がみられる。残存する長さは53.6cm、幅9.3cm、厚さ8.1cm、杭先の長さは36.0cmである。

#### SA01 杭C (第18図)

3は木杭であるが、腐朽により杭上部と裏面が大きく欠損している。木取りはミカン割り材。杭先は4方向以上から中心へ向けて削り出し、先端部で5面の平坦面が認められる。一部表皮の残存がみられる。残存する長さは36.6cm、幅7.4cm、厚さ6.0cm、杭先の長さは21.7cmである。

#### SA01 杭G (第18図)

4はやや湾曲する丸材の木杭である。木取りは芯持ち材。杭先は4方向から中心に向かって削り出し、工具痕と細かい擦痕がみられる。一部表皮の残存がみられる。残存する長さは51.6cm、幅7.6cm、厚さ6.6cm、杭先の長さは21.3cmである。

#### SK01 (第19~29図)

5は陶器の瓶で瀬戸美濃系陶器と思われる。胴下~底部が残存する。外面は露胎だが釉が飛散し、煤の付着と破断面の一部に被熱の痕跡が認められる。内面は鉄釉である。表採の破片資料と接合する。表採部分は令和4年度の試掘調査時に排土と共に地表に現れたものか。

6~9は瓦である。いずれも二次的な摩耗が認められ、転用砥具として再利用されたとみられる。6は平瓦で、木桶内側、底板面より約10~20cm上のやや浮いた位置から凹面を上にして出土した。1端面と両側面の一部が残存する。凹面と右側面および破断面の一部を摩耗し、特に右側面に顕著にみられる。色調は灰白だが中央部分は暗灰色を呈する。7も平瓦である。1端面と両側面の一部が残存、側端面を面取りする。凹面と側面に摩耗が認められ、特に凹面中心部と左側面に目立つ。色調は灰白色で凹面中心部が暗灰色を呈する。8は有段の丸瓦で、伏間瓦と思われる。色調は暗灰色を呈する。凸面と端面~側面部の一部が摩耗し、特に段部全体と端面で顕著にみられる。9は棟瓦である。棟側切込が残存し、側面と端面を面取りする。棟部側の凸面から側面に穿孔が1か所みられる。凹凸面と側面に二次的な摩耗が認められる。

10・11は鉄製品である。10は鉄鎌で刃部を欠損し、峰は直線的である。茎は刃部付根で屈曲して先

端に向けて尖るよう先細り、断面は刃部側の幅が狭くなる形状である。11は鎌の口金で径2.4×2.3cmである。10の茎にはまったく状態で出土している。

12～18は石製品である。12は玄武岩で全体に平滑な摩耗がみられる。特に図上裏面はよく使い込まれており、砥石として使用されたと思われる。13は頁岩の砥石で、破断面を含め全面に摩耗がみられ、頂部は特に使用が認められる。14は礫岩の砥石である。全体を平滑にし、細かい擦痕と縦位の凹みがみられる。特に図上左上の使用が顕著である。15は流紋岩である。下部を欠くが破断面を含めた全体を摩耗し、割れ口付近に刃傷が認められる。16～18は礫で擦痕はみられないが全体的に滑らかである。17は凝灰岩、16・18は砂岩。

19～49は木製品である。元は1個体の木桶だが、部品ごとに個別に図示している。19～48は桶側板である。木取りは板目で木目の髓側を外面に向け使用している。表皮の剥離損傷が著しいが、幅は約9～11cmで、10.5cm前後のものが多い。長さは上部欠損のため不明である。23～27・29～45は外面下位に高さ約1～3cm前後で表皮の剥離もしくは凹みが認められ、タガの痕跡と思われる。なお図示できなかったが、タガの部材と思われる植物材が共伴して出土している。49は底板で内面側を図示している。a～gの部材から成る七枚矧ぎ。復元径は95.3×94.1cm、厚さ3.7cmである。木目の観察からa・b、f・gは一枚の板材を2分割した可能性が高い。板材同士は側面に穿った枘穴と木釘によって連結する。それぞれの枘穴は、aが右2か所、bが右2か所、cは左右各2か所、dは左右各5か所、eは左5か所と右3か所、fは左3か所と右2か所に確認できるが、腐朽により対応する枘穴を確認できない箇所がある。またc d間1番下及びe f間1番上の枘穴に木釘が一部残存する。

#### A区遺構外（第30図）

50は須恵器の壺である。口径は復元径11.4cmで、軽量感がありやや丸みのある体下部から立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。南比企産で9世紀中葉～後半の所産とみられる。遺物包含層より出土した。51～53は磁器である。51は瀬戸美濃系の染付皿で、見込み部に松竹梅文と籠目文が施される。高台部は蛇目高台で、畳付は摩耗し、高台内に二次的な刃傷の痕跡がみられる。また、見込み部破断面に焼継の痕跡が認められる。表土掘削中に出土。52は肥前系磁器の猪口である。筒状の器形で外面に山水文の染付を施す。表土掘削中に出土した。53は碗の体部小片である。肥前系磁器で、外面に斜め格子と草花文を染付し焼継がみられる。19世紀頃か。遺物包含層中から出土した。54は焙烙の口縁部破片資料である。胎土に金雲母を多量に含み、地山上から出土した。

55～57は平瓦である。55は側端面を面取り、凸面にヘラナデ施し、キラコがみられる。凹面と側面を二次的に摩耗している。56は側端面を面取りし凸面にヘラナデがみられる。凹面と破断面の一部がやや摩耗する。56・57は砥具として転用か。57は側端面を面取りし、凹面にヘラナデがみられ、器面に細かい工具による擦痕がみられる。いずれも表土掘削中からの出土。58は鉄滓で、地山上より出土した。

#### （2）B区

##### SD01（第31図）

59・60はロクロ土師器である。59は壺で体下～底部が残存するが、器面が摩耗しており底部の調整

は不明瞭である。60は壺の底部で、底部回転糸切り後無調整。底部外面にごく浅く2条の平行する工具線が認められ、底部内面の中心に焼成前の凹みがみられる。61は須恵器で、甕胴部の小片である。外面半分ほどに自然釉がかかるが、細かな剥離がみられる。内面は無文あて具痕。東金子産か。62～66は焙烙である。62・63は同一個体の可能性があり、口縁～体部が残存する。体部は直線的に立ち上がり口縁部にかけて緩く内湾する形状で、口縁部と体部の境に稜を有する。外面は横ナデと指頭圧痕、内面は横ナデとナデを施す。63には内面にユビナデと指頭圧痕による内耳の痕跡が認められる。64～66は口縁部の小片である。体部が直線的で口縁部は緩く内湾する形状で、65は口唇部内側をつまみ出している。67は瓦質土器の鉢である。口縁部の破片資料で、口唇部は受口状を呈する。68～70は陶器の破片資料である。68は鉢で、片口の痕跡を残す。内外面に鉄釉を施釉。69は鉢で、緩い受口状の口唇部をつくり、外面口縁部と体部の境で稜を有する。内外面に鉄釉を施釉。70は擂鉢で胴下～底部が残存し、内面に櫛状工具による8条1単位の擂目を有し、鉄釉を施釉する。底部は回転糸切り痕が残る。いずれの陶器も瀬戸美濃系と考える。

71～73は石製品である。71は石灰岩製の砥石である。全面を非常に良く使い込んでいる。掘削を止めた底面付近（2層中）より出土している。72は緑泥片岩の破片資料で板碑の剥離片と考えられる。73は玄武岩の砥石である。欠損が著しいが、残存面に使用痕が顕著にみられる。

#### SD02（第32図）

74は流紋岩の砥石である。全面を平滑に摩耗し、片面に斜位の凹みがみられる。75は石英で、剥離面を全面摩耗している。

#### B区遺構外（第32図）

76は土人形で、いわゆるぶら人形である。型合わせで胴部前面のみ残存。表採遺物である。77は平瓦である。側端面は面取りし、凹凸面と側面に摩耗が認められる。燻し瓦でキラコがみられる。78～80は鉄滓である。いずれも地山上より出土した。

### （3）C区

#### C区遺構外（第32図）

81は鉄滓で、遺物包含層より出土している。82は軽石である。一部掘削段階で欠損した。表面は脆弱である。地山に食い込んだ状態で出土した。

### （4）DE区

#### SK04（第33図）

83～88は木製品である。83は板材で上下部を平滑化する。木取りは板目である。84は棒材で、断面が三角形状になるよう中央付近から両脇を加工する。下部は1方向から斜位に削り出す。杭として使用か。85は幅の狭い板材で、頂部は丸みを帯び、表面中央付近から片側に向かって片刃状に削り出している。86・87は板材で図上上部を斜位に欠く形状が類似するが、腐朽により明確な加工痕は確認できない。出土状況から同一個体の可能性がある。87は下部を平滑に加工し、表面にわずかに横・斜位の

擦痕がみられる。88は薄い板材で、表面には段状に削った加工痕と裏面に斜位の細かい工具痕が認められる。

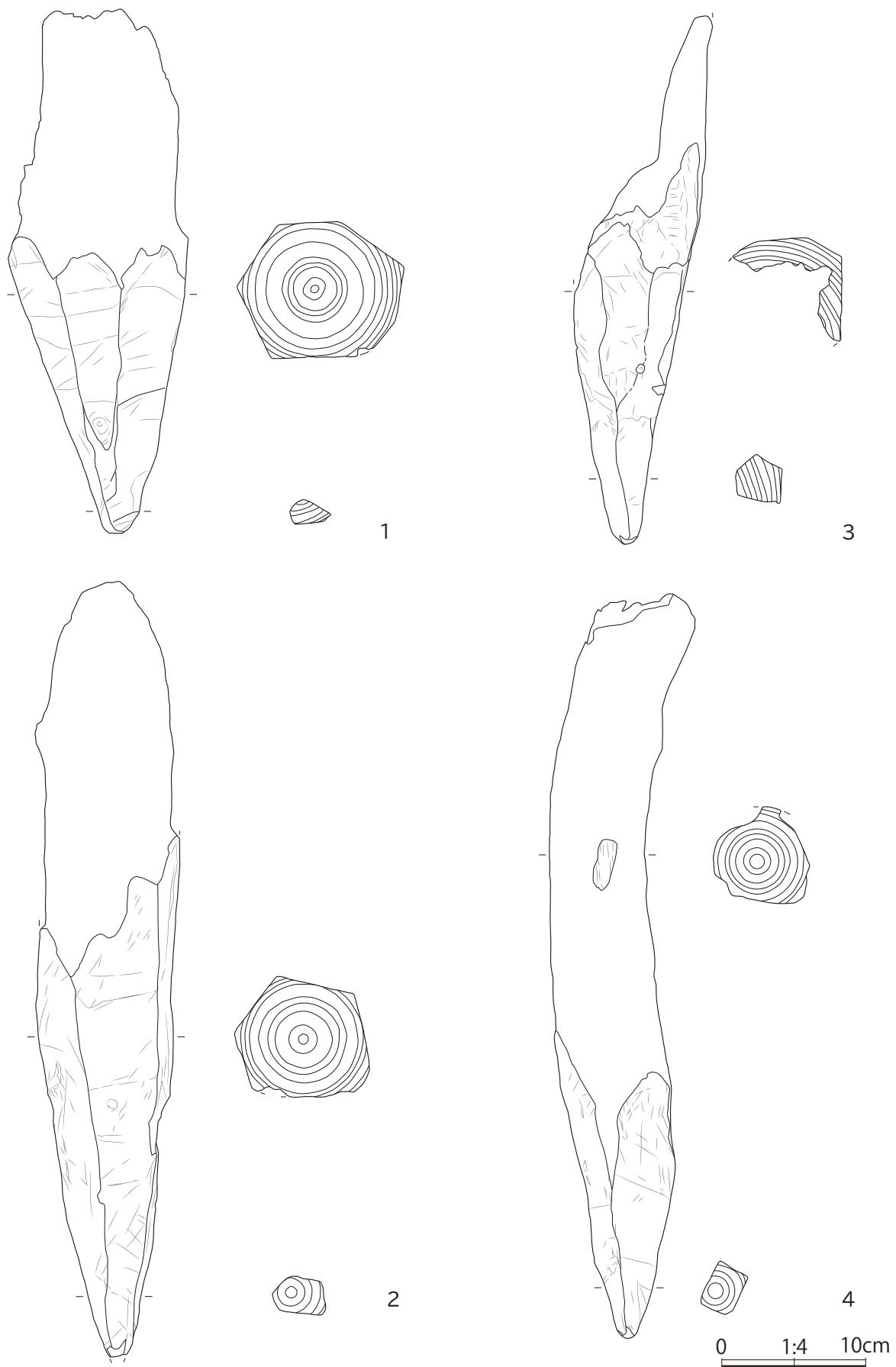
#### SD03 (第34図)

89はロクロ土師器の坏である。底部が残存するが、器面摩耗のため調整は不明瞭である。90は土師器甕の胴下～底部で、器厚は薄く、外面を斜位のヘラ削りと内面にナデを施す。91～99は須恵器で、91～94は坏の底部である。91は底部回転ヘラ削りで、内面のロクロ目が明瞭である。内外面を摩耗するが特に内面が顕著である。転用砥具として使用か。南北企産で8世紀中葉に比定される。92は底部回転糸切り後無調整で、体部は直線的に立ち上がる。底部内面に二次的な摩耗がみられる。93は底部から体部にかけてやや丸みを持って立ち上がり、底部は回転糸切り後無調整である。92・93共に南北企産で9世紀中葉～後半の所産である。94は底部回転糸切り後無調整で焼成はやや甘く、末野産と考える。95は甕の口縁部である。東金子産か。96～99は甕胴部の破片資料である。96は外面に自然釉が付着し、内面は無文あて具痕後ナデを施す。内面と破断面の一部に摩耗がみられる。東金子産。97は外面平行タタキ目、内面無文あて具痕後ナデを施す。破断面の一部は摩耗する。南北企産である。98は外面上位を平行タタキ目、下位を平行タタキ目後ナデ、内面無文あて具痕である。内外面にやや摩耗がみられる。東金子産。99は外面平行タタキ目、内面は無文あて具痕後ナデ。内外面をやや摩耗する。三和産か。100はミニチュアの磁器の盃で、内面に付着物が認められる。

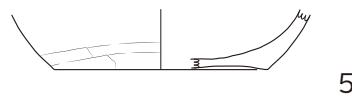
101～103は平瓦である。いずれも凹凸面に二次的な摩耗が認められる。101は端面と側面、102は1側面が一部残存する。共にキラコがみられる。103は凹面を欠損し、凸面と側面の残存部に顕著な摩耗が認められるが、盛土から流入の可能性がある。104・105は土塊である。被熱の痕跡は見られないが、炉壁の一部か。

#### D区遺構外 (第34図)

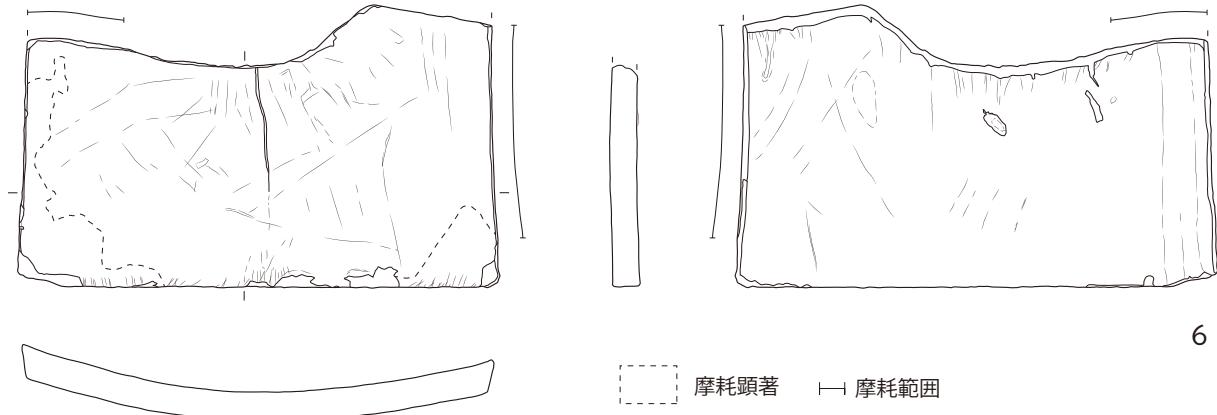
106はロクロ土師器の坏である。体下部の小片で、体部は緩く内湾しながら立ち上がる。器面の風化が目立つが、外面のロクロ目は確認できる。地山上からの出土である。



第18図 A区 SA01出土遺物

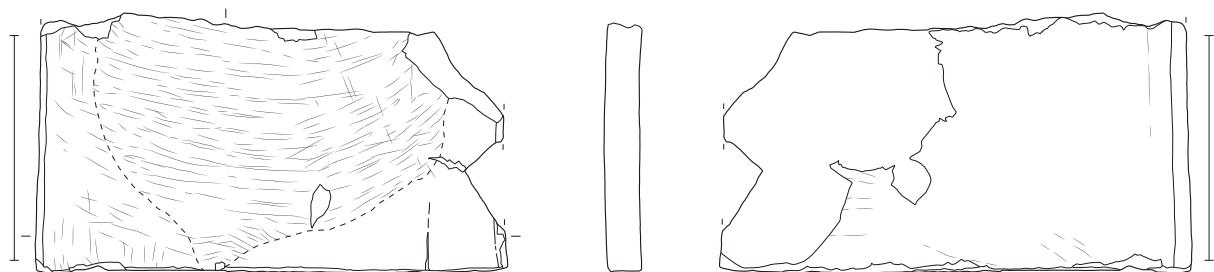


5



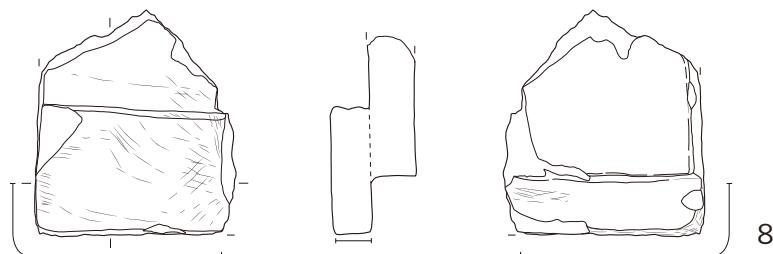
6

□ 摩耗顯著 ━ 摩耗範囲



7

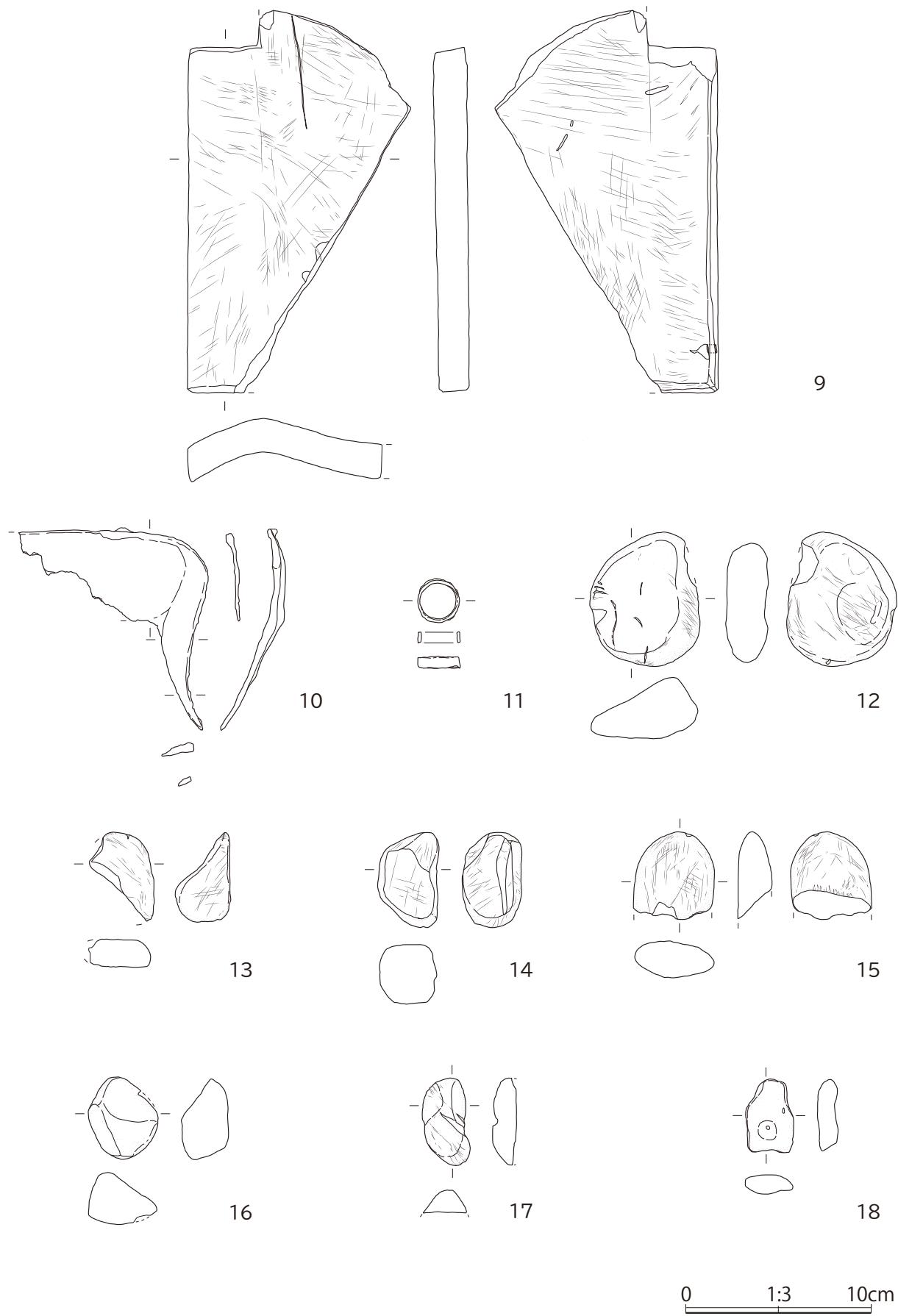
□ 摩耗顯著 ━ 摩耗範囲



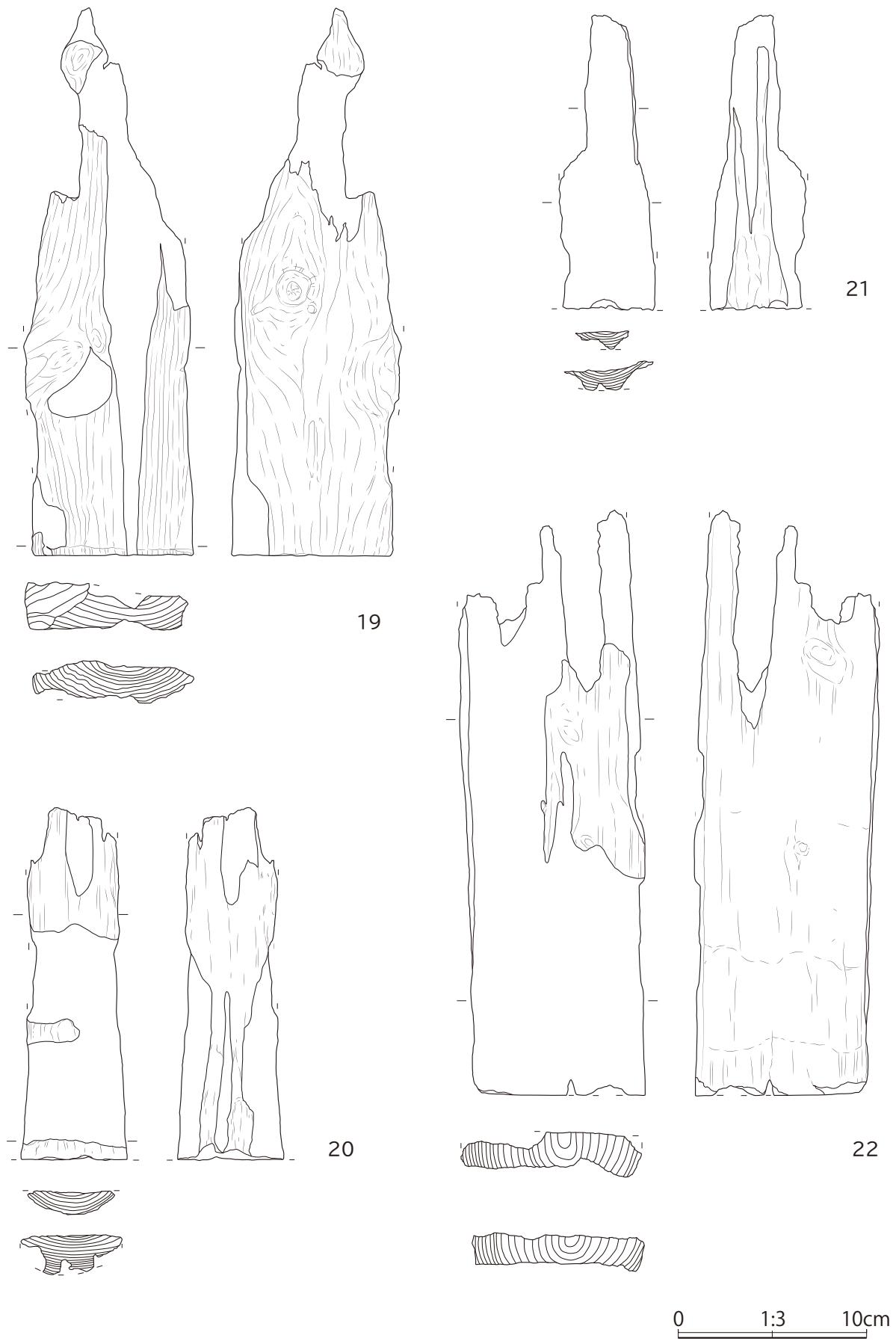
8

━ 摩耗範囲

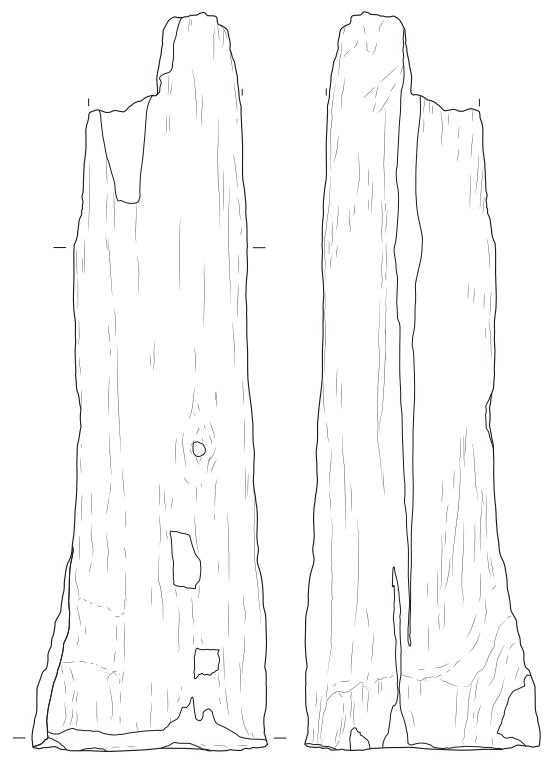
第19図 A区 SK01 出土遺物 (1)



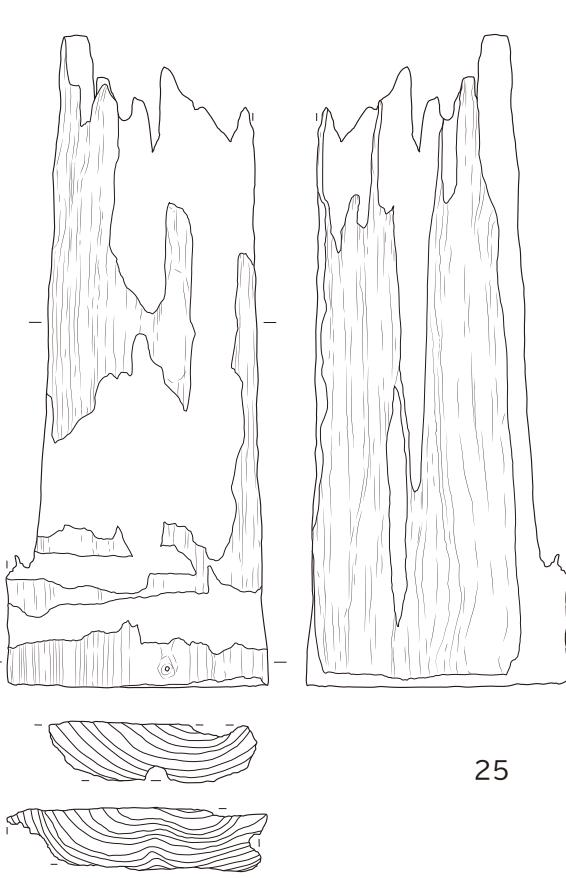
第20図 A区 SK01出土遺物 (2)



第21図 A区 SK01出土遺物 (3)



23



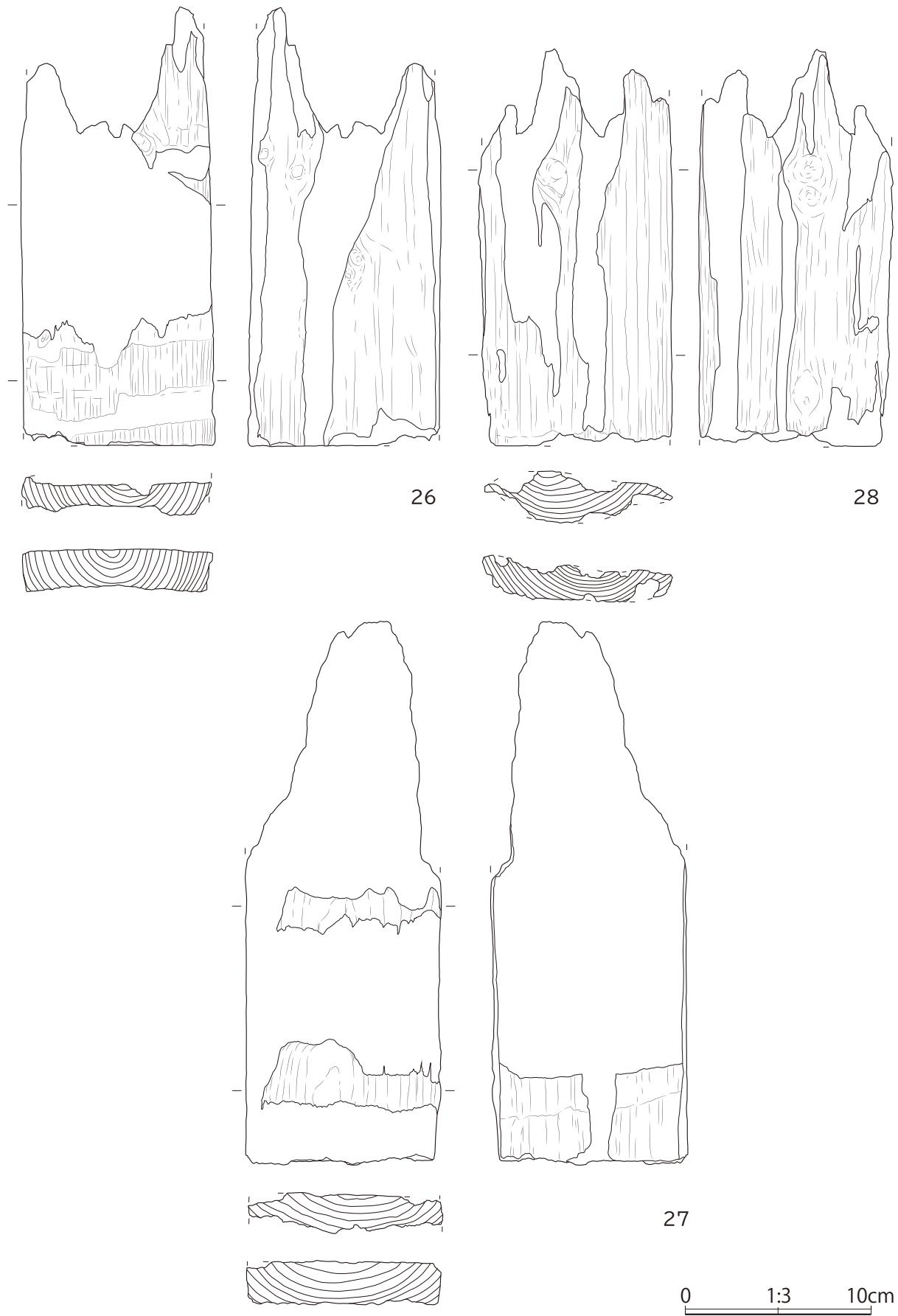
25



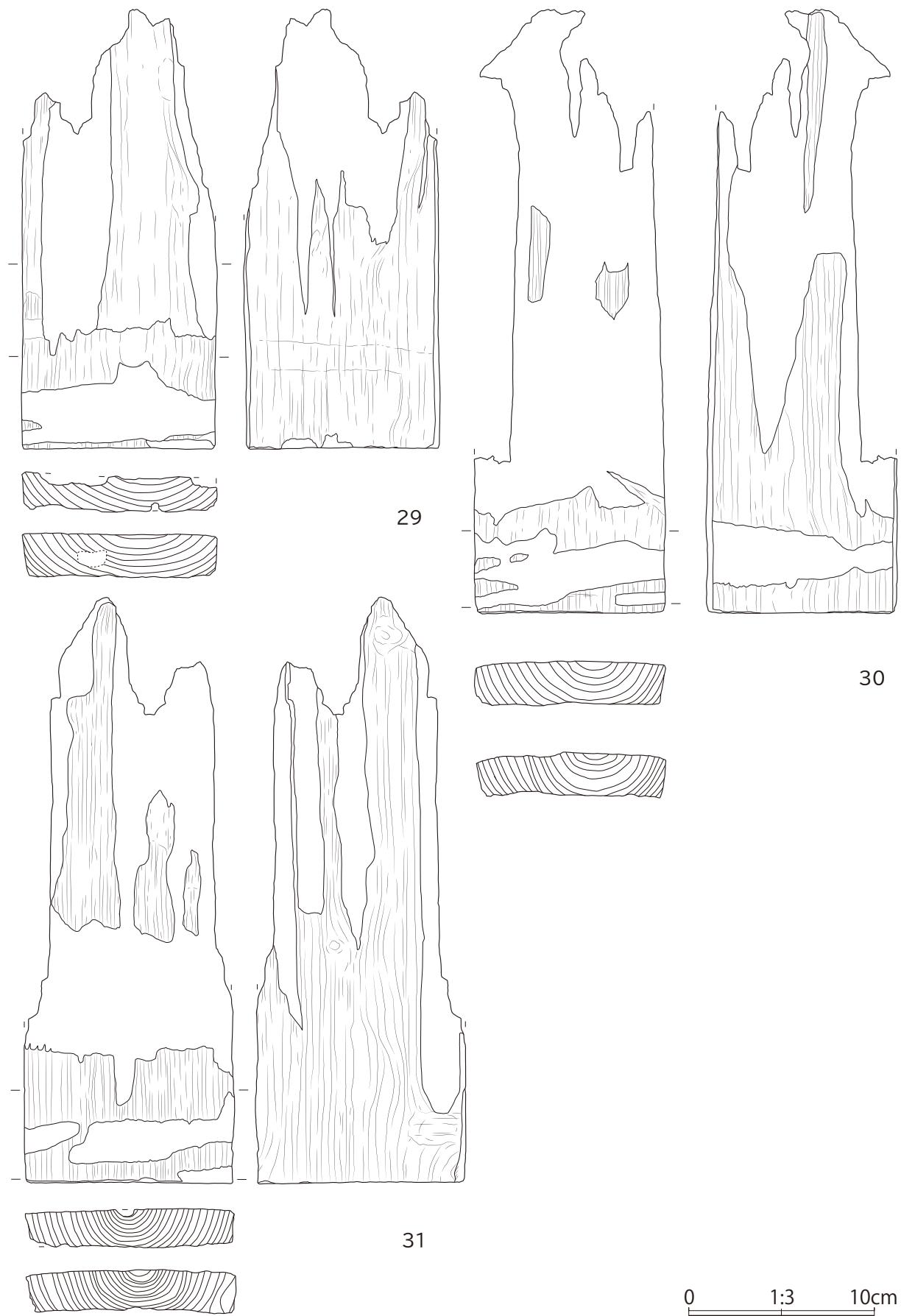
24

0 1:3 10cm

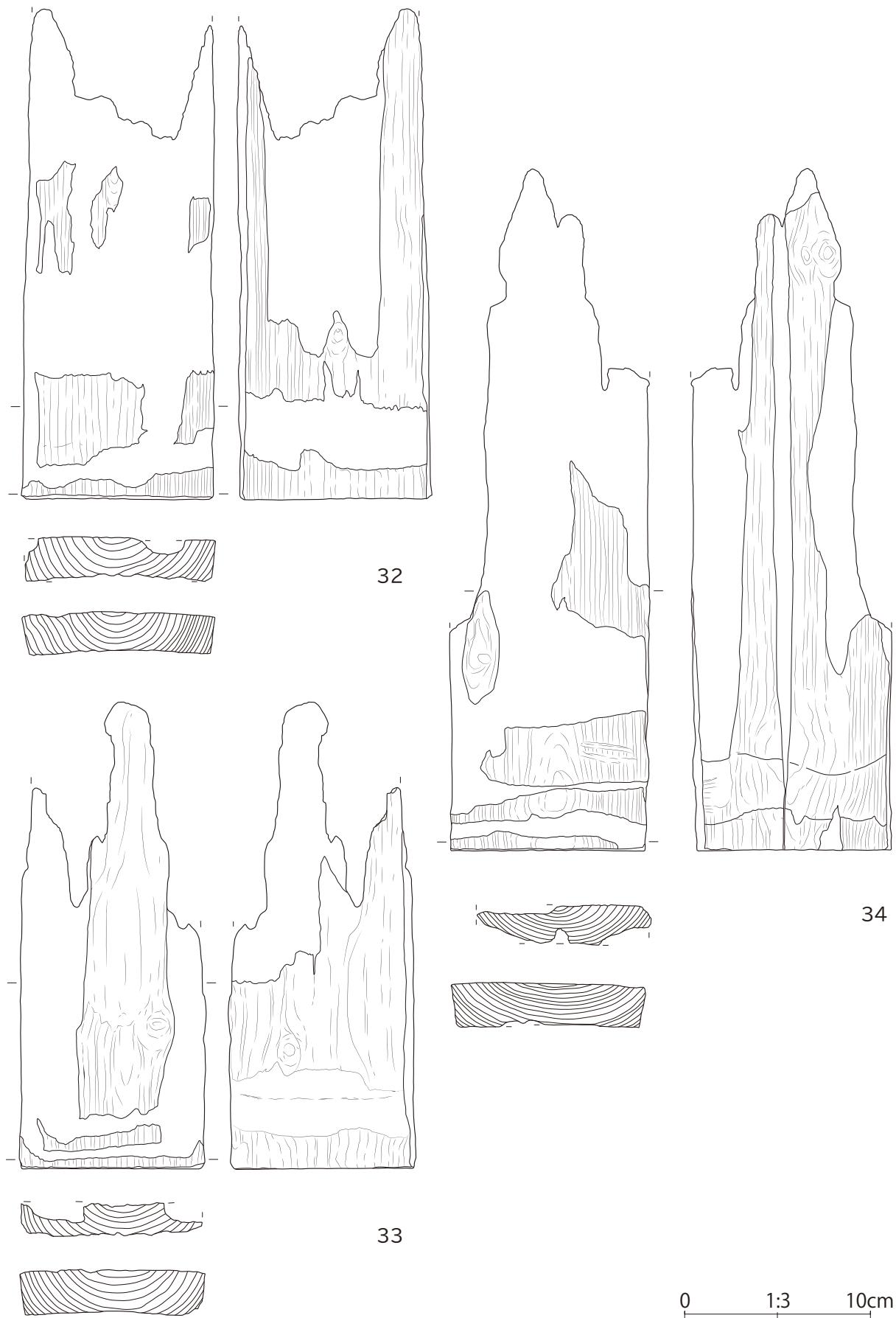
第22図 A区 SK01 出土遺物 (4)



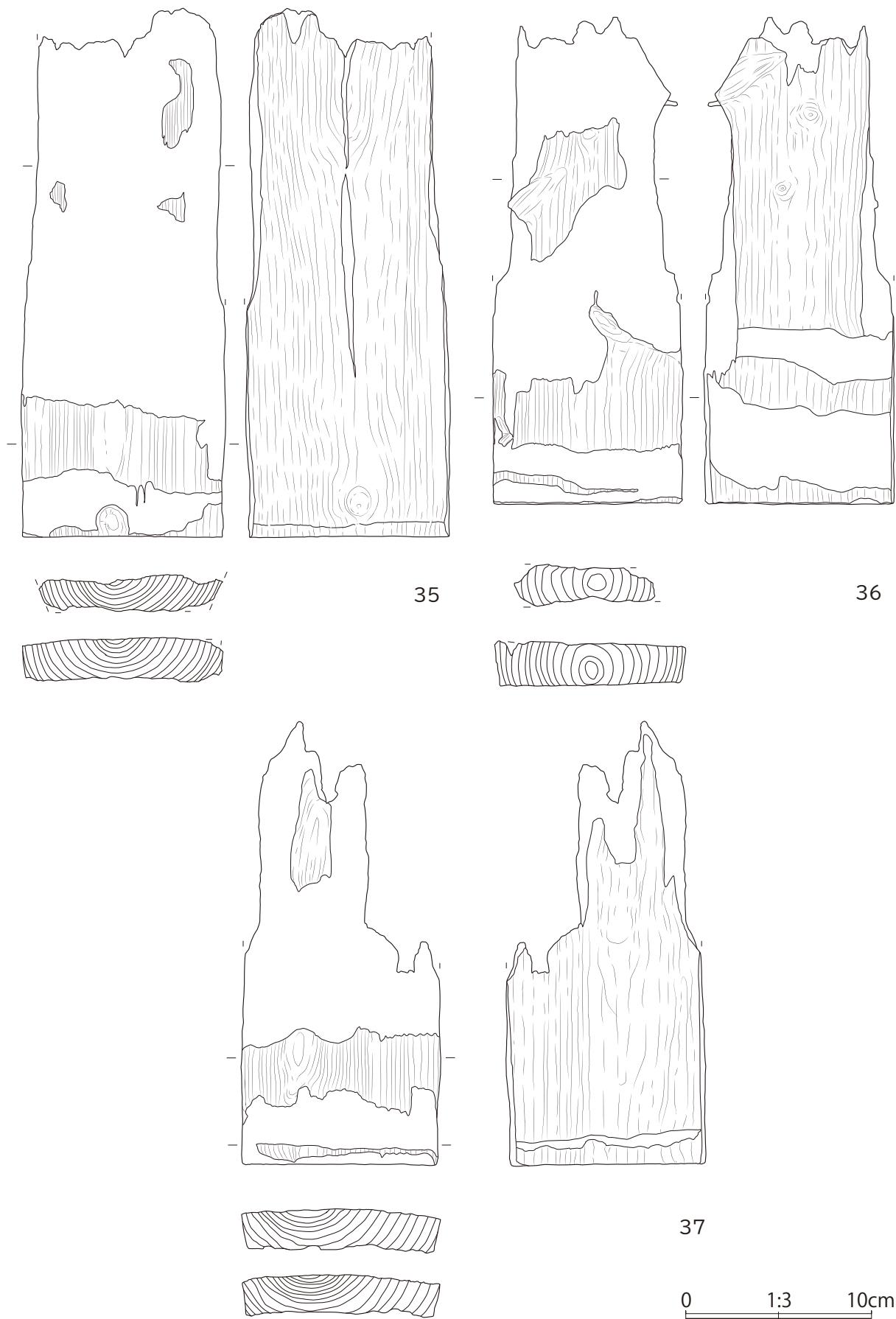
第23図 A区 SK01 出土遺物 (5)



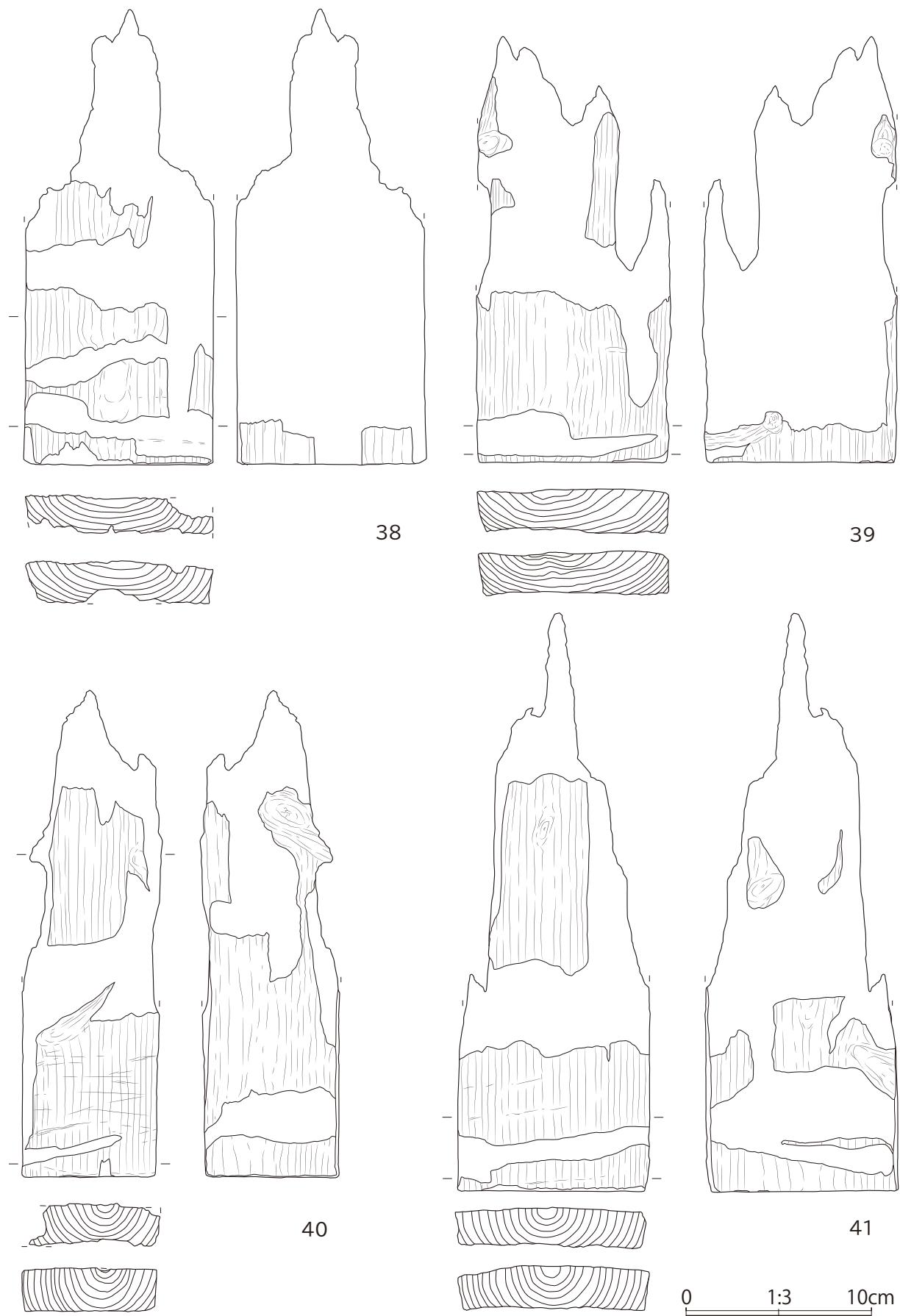
第24図 A区 SK01 出土遺物 (6)



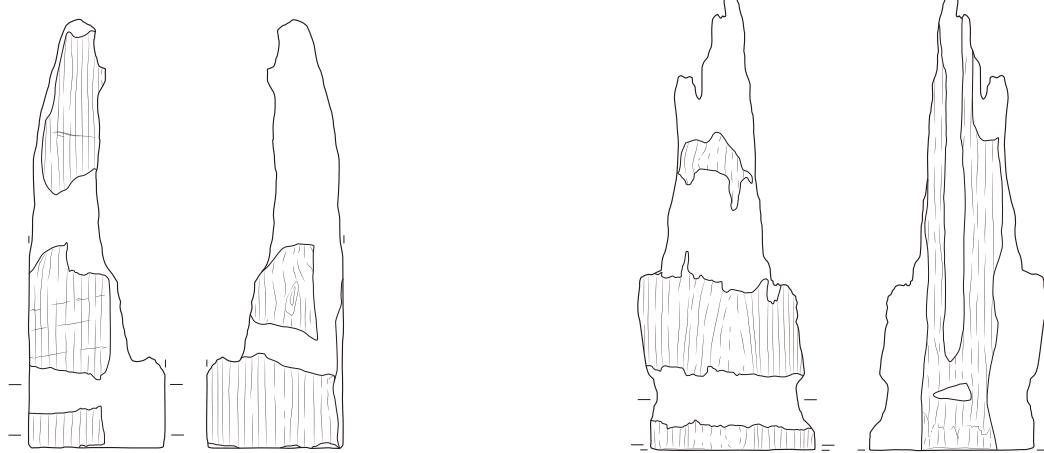
第25図 A区 SK01 出土遺物 (7)



第26図 A区 SK01 出土遺物 (8)

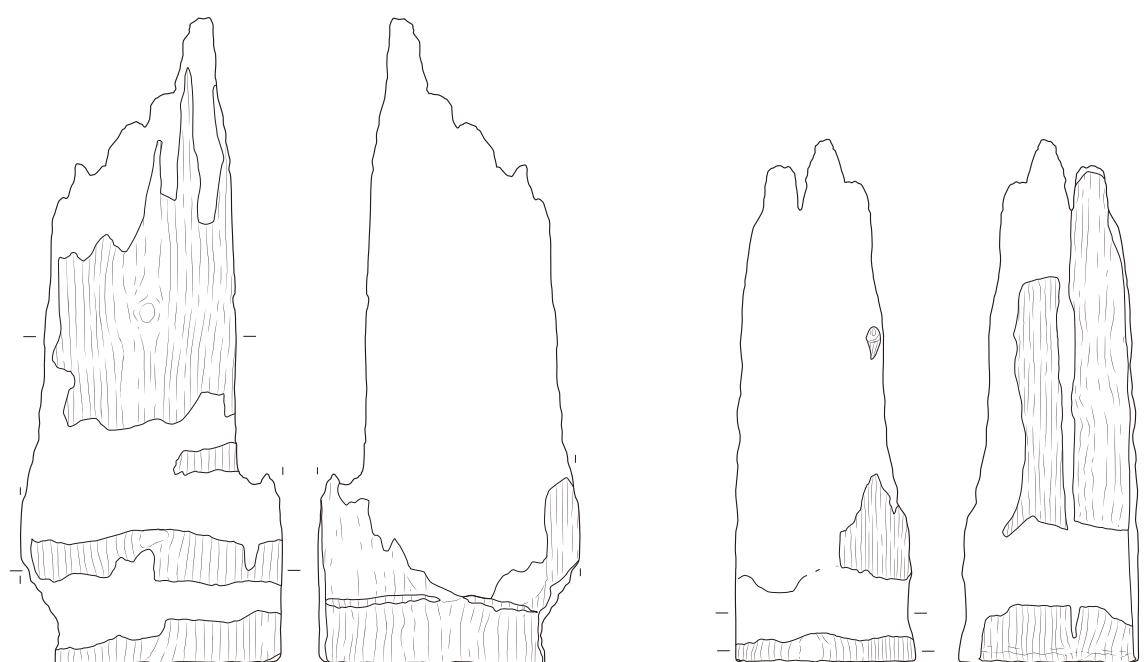


第27図 A区 SK01 出土遺物 (9)



42

43

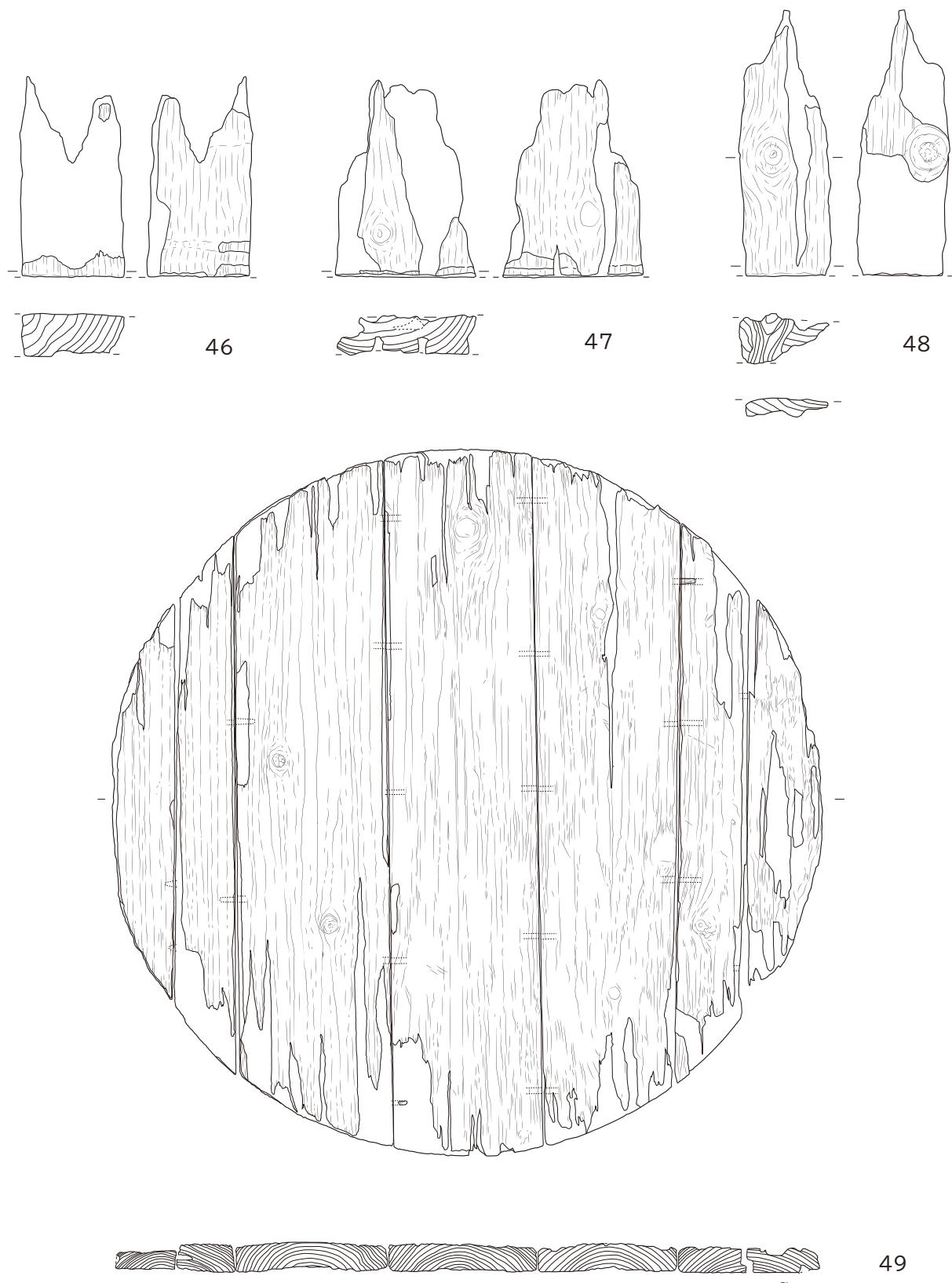


44

45

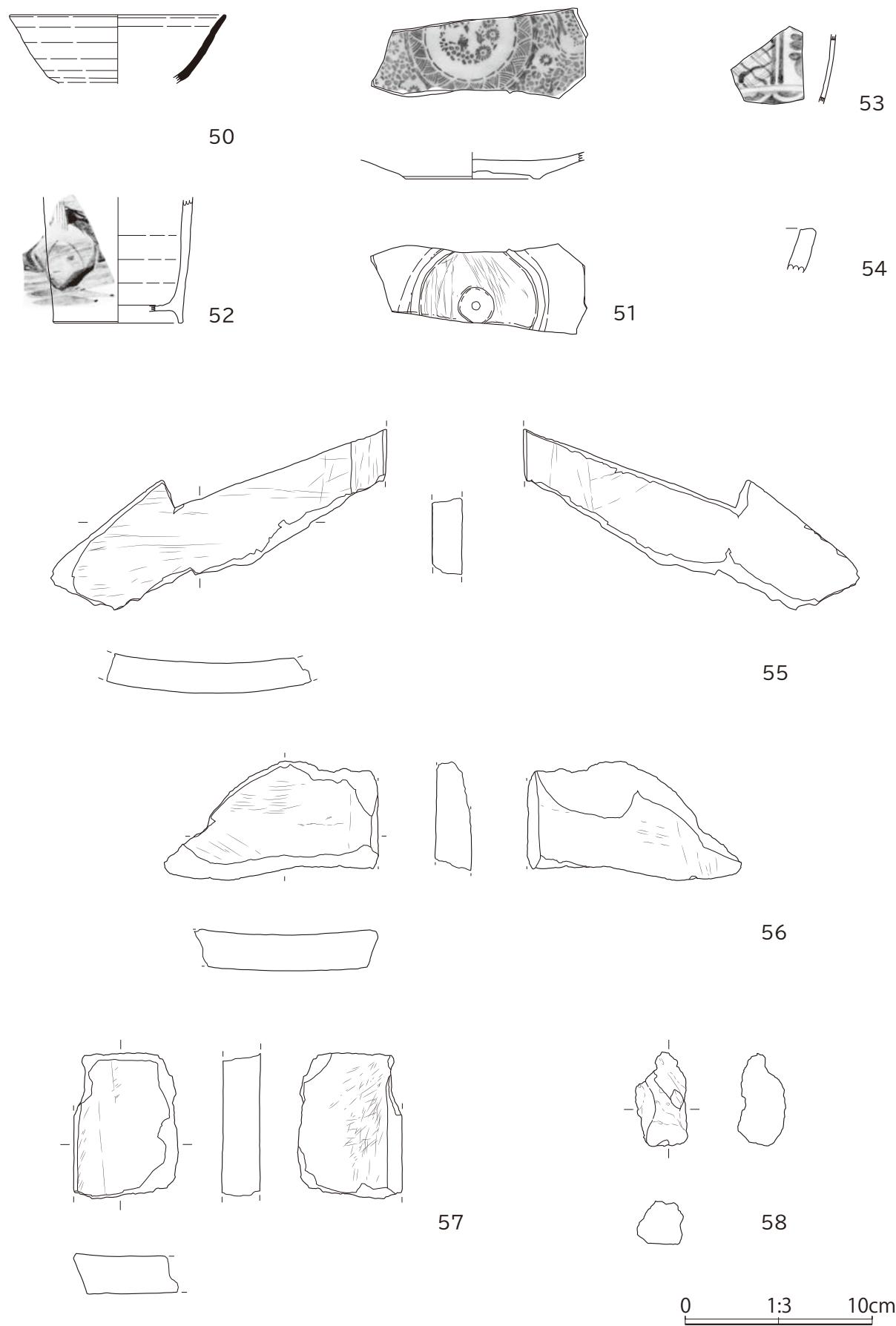
0 1:3 10cm

第28図 A区 SK01 出土遺物 (10)

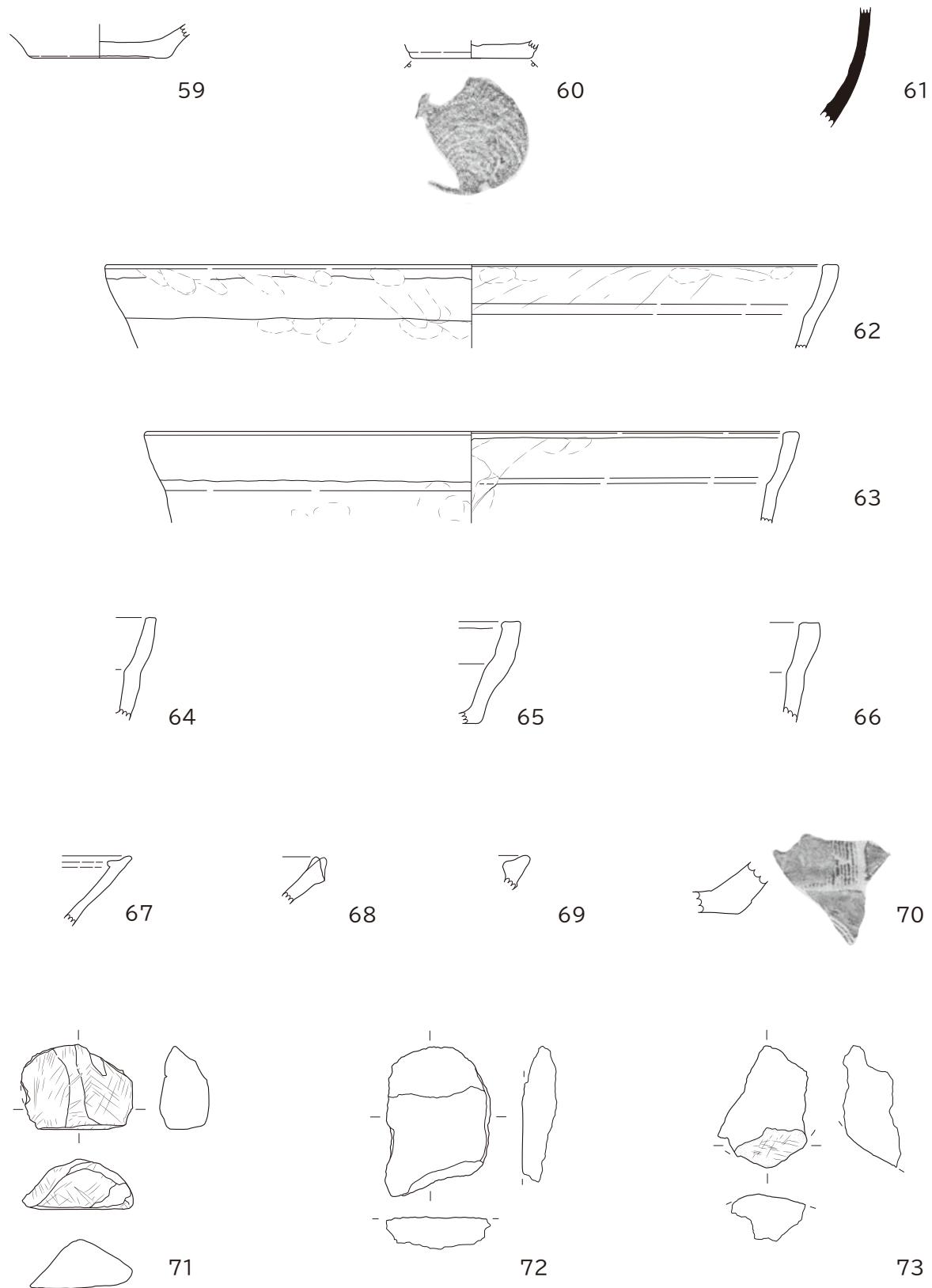


0 1:3 10cm (46~48) 0 1:8 20cm (49)

第29図 A区 SK01 出土遺物 (11)



第30図 A区遺構外出土遺物

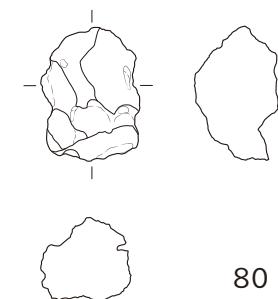
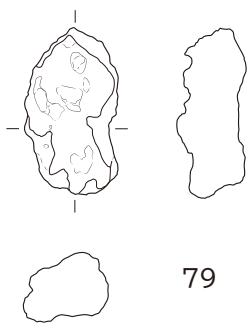
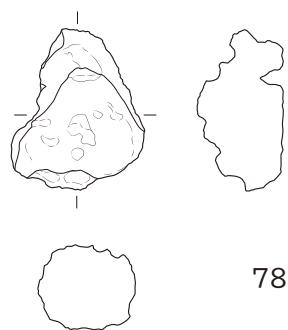
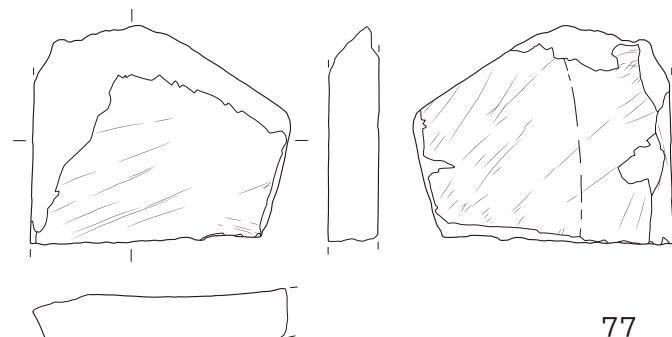
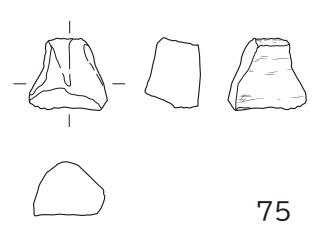
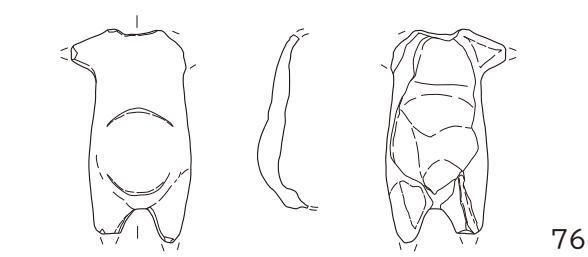
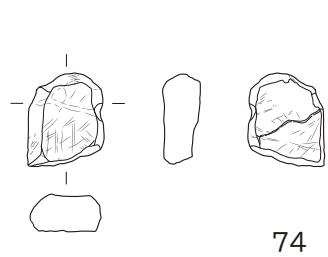


0 1:3 10cm

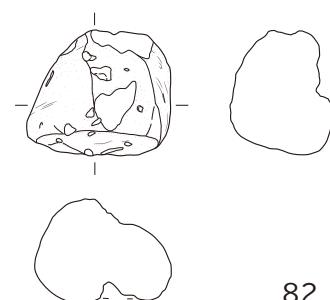
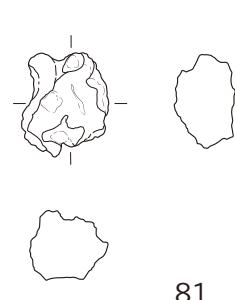
第31図 B区SD01出土遺物

B区 SD02

B区 遺構外

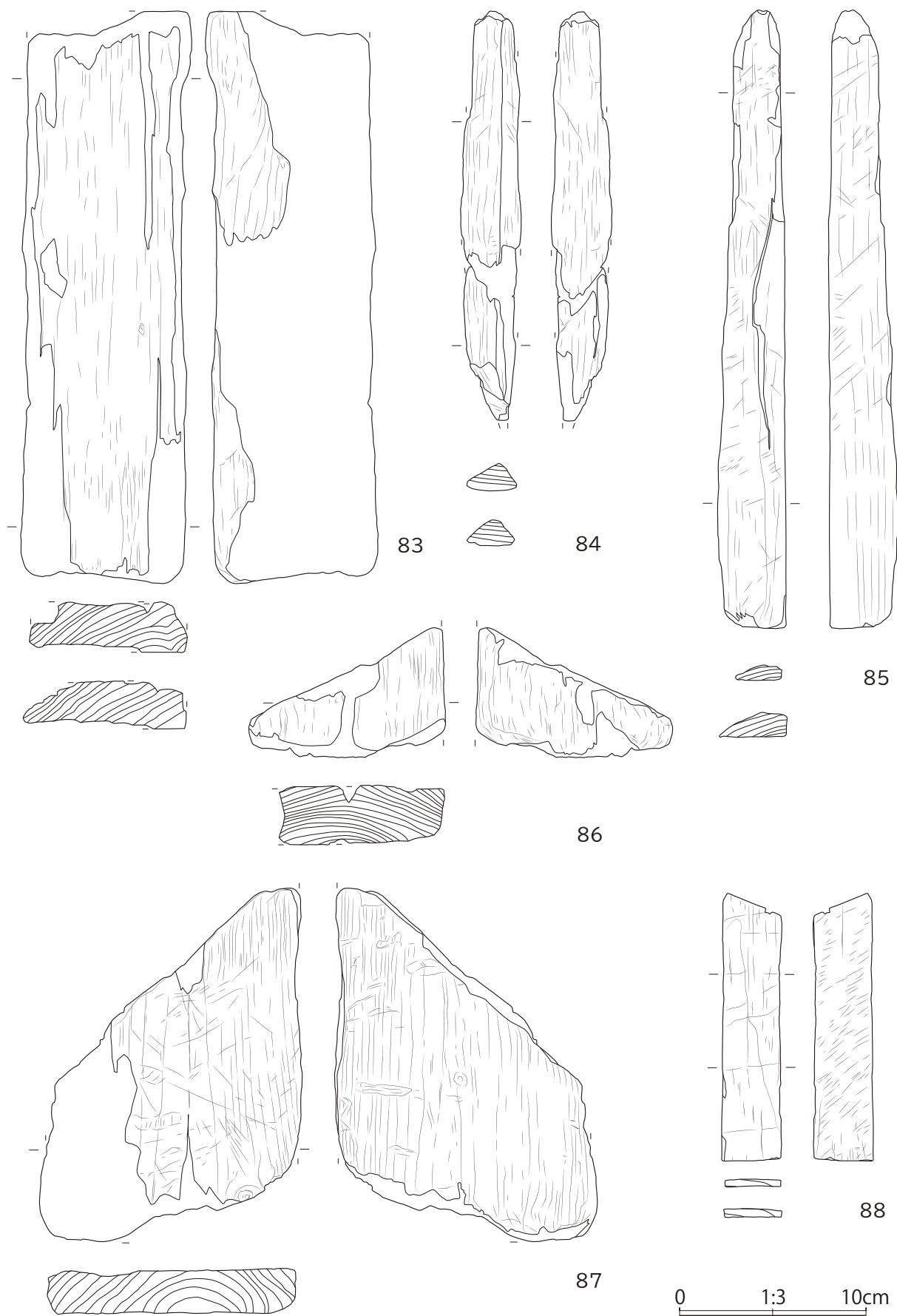


C区 遺構外



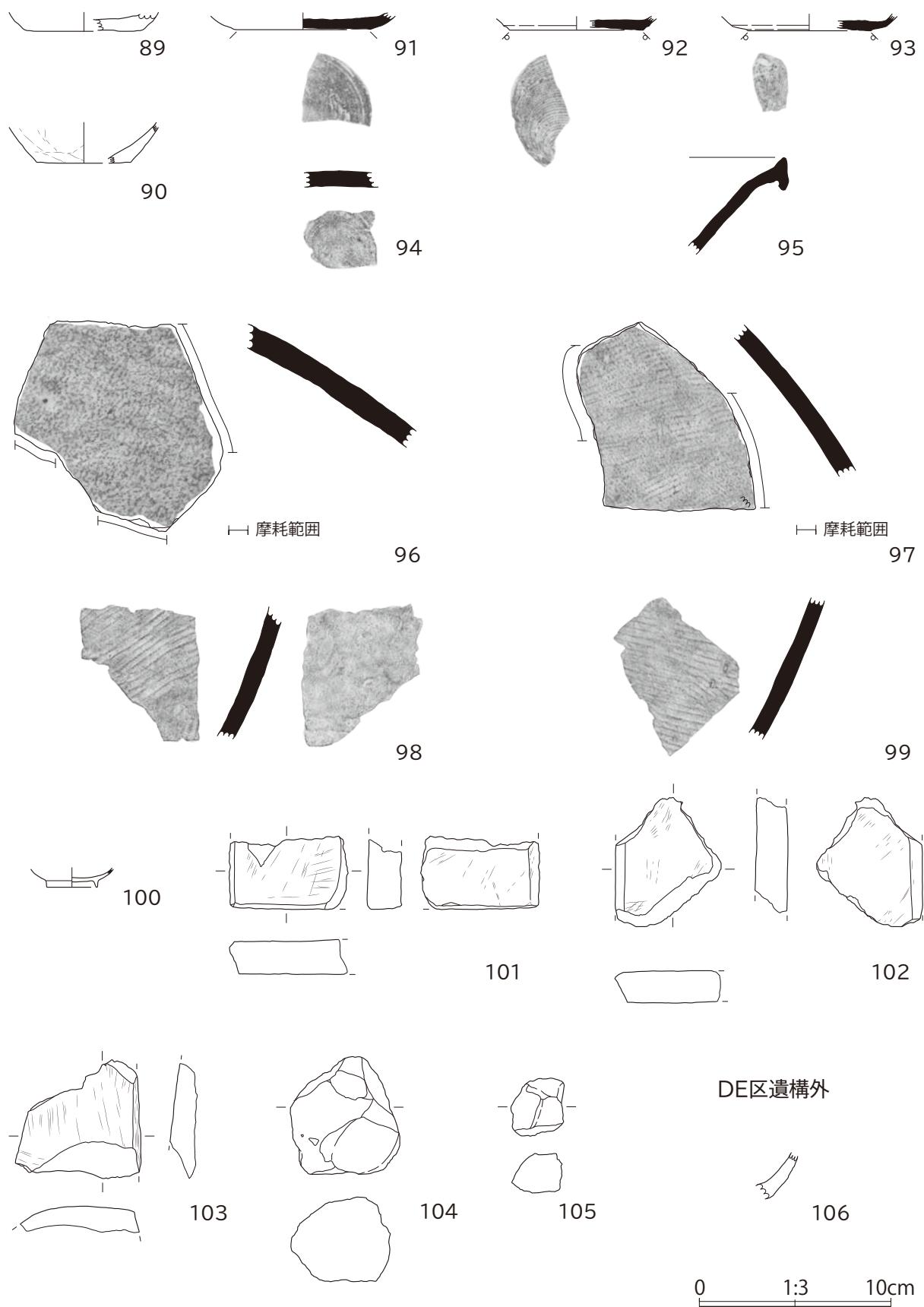
0 1:3 10cm

第32図 B区 SD02・遺構外・C区遺構外出土遺物



第33図 DE区SK04出土遺物

DE区SD03



第34図 DE区 SD03・遺構外出土遺物

第3表 遺物観察表（土器・陶磁器等）

図版番号	遺物番号	遺構名	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	色調	上外面 下内面	調整・施文 (外面)	調整・施文 (内面)	備考	写真図版
19	5	SK01	陶器	瓶	—	8.5	(2.2)	白色粒(少量)・黒色粒・角閃石	褐色 暗褐色	回転ナデ、底部 回転ヘラ削り。 鉄釉少量飛散	鉄釉施釉	外面に煤少量付着。破断面被熱痕あり。瀬戸美濃系陶器	10	
30	50	A区 遺構外	須恵器	坏	11.4	—	(3.7)	白色粒・黒色粒・小礫・角 閃石(少量)・海綿状骨針	灰 灰	回転ナデ	回転ナデ	南比企産。遺物 包含層中出土	18	
30	51	A区 遺構外	磁器	皿	—	7.2	(1.0)	黒色粒・石英	灰白 灰白	透明釉施釉	松竹梅文・籠目 文染付、透明釉 施釉	蛇目高台。疊付 摩耗、高台内刃 物痕、割口に焼 継痕あり。瀬戸 美濃系磁器。表 土掘削中出土	18	
30	52	A区 遺構外	磁器	猪口	—	6.7	(6.7)	黒色粒	灰白 灰白	山水文染付、透 明釉施釉	回転ナデ、無施 釉	肥前系磁器。表 土掘削中出土	18	
30	53	A区 遺構外	磁器	碗	—	—	(3.6)	黒色粒	明緑灰 灰白	斜め格子・草花 文染付、施釉	透明釉施釉	肥前系磁器。焼 継痕あり。遺物 包含層中出土	18	
30	54	A区 遺構外	土師質 土器	焰焰	—	—	(2.4)	白色粒・黒色 粒・橙色粒・ 角閃石・金雲 母(多量)	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	ナデ、横ナデ	ナデ、横ナデ	地山上出土	18	
31	59	SD01	口クロ 土師器	坏	—	6.7	(1.2)	黒色粒・橙色 粒・角閃石	明褐色 にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ	摩耗のため調整 不明瞭	18	
31	60	SD01	口クロ 土師器	坏	—	5.8	(0.7)	白色粒・黒色 粒・橙色粒・ 角閃石	浅黄橙 灰白	回転ナデ、底部 回転糸切り後無 調整	回転ナデ	外面に工具痕、 内面に凹みあり	18	
31	61	SD01	須恵器	甕	—	—	(6.0)	白色粒・黒色 粒・砂粒	灰 灰	回転ナデ、一部 自然釉付着	回転ナデ、無文 あて具痕	東金子産か	18	
31	62	SD01	瓦質 土器	焰焰	36.7	—	(4.2)	白色粒・黒色 粒・橙色粒・ 角閃石	黒褐色 褐灰色	ナデ、横ナデ、 指頭圧痕	ナデ、横ナデ、 指頭圧痕		18	
31	63	SD01	瓦質 土器	焰焰	32.8	—	(4.6)	白色粒・黒色 粒・角閃石	黒褐色 褐灰色	ナデ、横ナデ、 指頭圧痕	ナデ、横ナデ、 一部ユビナデ	内耳の痕跡あ り。外面煤付着。 溝肩部出土	18	
31	64	SD01	瓦質 土器	焰焰	—	—	(5.1)	白色粒・黒色 粒・角閃石	黒褐色 灰褐色	ナデ、横ナデ	ナデ、横ナデ	外面煤付着	18	
31	65	SD01	瓦質 土器	焰焰	—	—	5.1	白色粒・黒色 粒・橙色粒(極 少量)・角閃 石(多量)	黒褐色 にぶい褐色	横ナデ、指頭圧 痕	横ナデ	外面鉄分付着	18	
31	66	SD01	瓦質 土器	焰焰	—	—	(5.0)	白色粒・黒色 粒・角閃石	黒褐色 褐灰色	ナデ、横ナデ	ナデ、横ナデ	外面煤付着	18	
31	67	SD01	瓦質 土器	鉢	—	—	(3.5)	白色粒・黒色 粒・橙色粒(少 量)・角閃石	褐灰色 褐灰色	横ナデ	横ナデ		18	
31	68	SD01	陶器	片口鉢	—	—	(2.3)	白色粒・黒色 粒	黒褐色 黒褐色	鉄釉施釉	鉄釉施釉	口縁部に片口の 痕跡	18	
31	69	SD01	陶器	鉢	—	—	(1.7)	白色粒・黒色 粒・石英	褐 褐	鉄釉施釉	鉄釉施釉	内面剥離あり	18	
31	70	SD01	陶器	擂鉢	—	—	(1.6)	黒色粒・橙色 粒・石英・小 礫	暗赤褐色 灰赤	鉄釉施釉、底部 回転糸切り後無 調整	鉄釉施釉、8条 1単位の擂目		19	

図版番号	遺物番号	遺構名	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	色調	上外面 下内面	調整・施文 (外面)	調整・施文 (内面)	備考	写真図版
34	89	SD03	ロクロ土師器	坏	—	(6.0)	(1.0)	白色粒・黒色粒・橙色粒(少量)・角閃石(微量)	にぶい黄橙 にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	摩耗のため調整不明瞭	19	
34	90	SD03	土師器	甕	—	(4.9)	(1.9)	白色粒・砂粒・角閃石	にぶい橙 にぶい橙	斜位ヘラ削り	ナデ		19	
34	91	SD03	須恵器	坏	—	7.0	(0.7)	白色粒・黒色粒・角閃石・海綿状骨針(少量)	灰 灰	回転ナデ、底部回転ヘラ削り	回転ナデ	内面ロクロ目顯著、内外面二次的に摩耗。南比企産	19	
34	92	SD03	須恵器	坏	—	7.0	(0.6)	白色粒・黒色粒・角閃石・海綿状骨針	灰 灰	回転ナデ、底部回転糸切り後無調整	回転ナデ	内面二次的に摩耗。南比企産	19	
34	93	SD03	須恵器	坏	—	6.4	(0.8)	白色粒・黒色粒・角閃石・海綿状骨針	灰 灰	回転ナデ、底部回転糸切り後無調整	回転ナデ	南比企産	21	
34	94	SD03	須恵器	坏	—	—	(0.8)	白色粒・角閃石・小礫・砂粒	灰白 灰白	底部回転糸切り後無調整	回転ナデ	末野産か	21	
34	95	SD03	須恵器	甕	—	—	(5.1)	白色粒・黒色粒・小礫	灰 灰	回転ナデ	回転ナデ	東金子産か	21	
34	96	SD03	須恵器	甕	—	—	(5.6)	白色粒・黒色粒・小礫	灰 灰	ナデ、自然釉付着	無文あて具痕後ナデ	内面と破断面一部摩耗。東金子産	21	
34	97	SD03	須恵器	甕	—	—	(7.6)	白色粒・角閃石(少量)・海綿状骨針(少量)・小礫・砂粒	灰 灰	平行タタキ目	無文あて具痕後ナデ	破断面一部摩耗。南比企産	21	
34	98	SD03	須恵器	甕	—	—	(6.1)	白色粒・黒色粒・砂粒	褐灰 灰	平行タタキ目、一部タタキ目後ナデ	ナデ、無文あて具痕	内外面やや摩耗。東金子産	21	
34	99	SD03	須恵器	甕	—	—	(7.2)	白色粒・小礫・砂粒	灰 灰	平行タタキ目	無文あて具痕後ナデ	内外面やや摩耗。三和産か	21	
34	100	SD03	磁器	盃	—	2.6	(0.9)	黒色粒(少量)	灰白 灰白	透明釉施釉	透明釉施釉	底部完存。内面に付着物あり	21	
34	106	DE区 遺構外	ロクロ土師器	坏	—	—	(2.2)	白色粒・黒色粒・橙色粒・小礫・砂粒	にぶい橙 にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ		21	

第4表 遺物観察表（土製品等）

図版番号	遺物番号	遺構名	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	胎土	色調	上外面 下里面	備考	写真図版
19	6	SK01	平瓦	(14.9)	25.5	1.4	(737.0)	黒色粒・角閃石	灰白・暗灰 灰白・暗灰	短軸完存。側端面面取り。凹面・一部側面・破断面二次的摩耗。転用砥具	10	
19	7	SK01	平瓦	(13.8)	24.9	1.8	(796.0)	黒色粒・角閃石・砂粒	灰白・暗灰 灰白・暗灰	短軸ほぼ完存。側端面面取り。凹面擦痕・二次的摩耗。側面・端部二次的摩耗。転用砥具	10	
19	8	SK01	伏間瓦	(9.0)	(8.0)	3.4	(197.6)	白色粒・黒色粒・角閃石	暗灰 灰	凹面横ナデ、凸面ナデ、側端面面取り。凸面段部・端部二次的摩耗顕著。転用砥具	10	
20	9	SK01	棟瓦	(20.6)	(12.0)	1.8	(425.8)	白色粒(極少量)・黒色粒・角閃石	灰 灰白	側面・端面面取り、切込残存。凹凸面・側面に二次的摩耗と擦痕、棟部側凸面～側面に1穿孔あり。転用砥具	10	
30	55	A区 遺構外	平瓦	(9.7)	(18.0)	1.6	(150.9)	白色粒・黒色粒・角閃石	暗灰 褐灰	凸面ナデ、ヘラナデ、側端面面取り。凹面擦痕あり、凹面側面二次的に摩耗。転用砥具。表土出土	18	
30	56	A区 遺構外	平瓦	(6.3)	(11.4)	1.9	(113.8)	白色粒・黒色粒・角閃石	黄灰 黄灰	側端面面取り。凹凸面・側面二次的に摩耗。転用砥具。表土出土	18	
30	57	A区 遺構外	平瓦	(7.7)	(5.6)	2.0	(106.7)	白色粒・黒色粒・角閃石	暗灰 灰	側端面面取り。凹凸面二次的摩耗、凹面工具痕あり。転用砥具。表土出土	18	
32	76	B区 遺構外	土人形	(8.4)	(4.7)	0.9	(34.7)	白色粒・黒色粒・金雲母	橙 橙	胴部前面残存。表採	19	
32	77	B区 遺構外	平瓦	(8.7)	(10.3)	2.0	(167.4)	黒色粒・角閃石	灰 灰	側端面面取り、ヘラナデ。凹凸面・側面全体に二次的に摩耗、擦痕あり。転用砥具。一括資料	19	
34	101	SD03	平瓦	(3.8)	(6.2)	1.8	(45.7)	白色粒・黒色粒・角閃石	灰 灰白	端面・側端面面取り。全体に二次的摩耗、凹凸面に工具痕あり。転用砥具	21	
34	102	SD03	平瓦	(6.7)	(5.5)	1.7	(56.4)	白色粒・黒色粒・角閃石	灰 褐灰	側端面面取り。凹凸面二次的摩耗・擦痕あり。転用砥具	21	
34	103	SD03	平瓦	(6.1)	(6.5)	(1.3)	(41.6)	白色粒・黒色粒・角閃石	灰褐 不明	凹面欠損。凸面・側面二次的摩耗。転用砥具。盛土からの流入か	21	
34	104	SD03	土塊	6.15	5.6	4.4	117.5	白色粒・黒色粒・橙色粒・角閃石	橙・浅黄橙 橙・浅黄橙		21	
34	105	SD03	土塊	3.0	2.8	2.1	13.4	白色粒・黒色粒・橙色粒・角閃石	橙・浅黄橙 橙・浅黄橙		21	

第5表 遺物観察表 (石製品等)

図版番号	遺物番号	遺構名	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	写真図版
20	12	SK01	砥石	7.3	5.9	3.3	172.3	全体的に二次的に摩耗、玄武岩	10
20	13	SK01	砥石	4.8	3.5	1.5	39.2	ほぼ全面摩耗、頁岩	10
20	14	SK01	砥石	5.1	3.3	3.2	79.1	全体的に摩耗、スジ状の凹みあり。礫岩	10
20	15	SK01	礫(砥石)	4.7	4.4	2.0	53.0	全体的に摩耗、一部刃物による痕跡、擦痕あり。流紋岩	10
20	16	SK01	礫	4.5	3.8	2.5	52.3	砂岩	10
20	17	SK01	礫	4.7	2.6	1.3	19.3	凝灰岩	10
20	18	SK01	礫	4.0	2.6	1.0	16.1	砂岩	10
31	71	SD01	砥石	4.2	5.6	2.4	64.5	石灰岩	19
31	72	SD01	板碑片	(7.5)	(5.2)	(1.7)	93.9	緑泥片岩	19
31	73	SD01	砥石	(6.1)	(4.5)	(2.4)	77.4	玄武岩	19
32	74	SD02	砥石	3.7	3.0	1.5	26.7	ほぼ全面を使用、凹みあり。流紋岩	19
32	75	SD02	礫	2.8	3.1	2.2	23.9	石英。剥離面4面に擦痕あり	19
32	82	C区遺構外	軽石	5.0	5.7	4.1	29.2	地山に若干入り込み出土	19

第6表 遺物観察表 (金属製品等)

図版番号	遺物番号	遺構名	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	写真図版
20	10	SK01	鉄鎌	10.9	(10.2)	0.7	33.0	No.11と共に出土	10
20	11	SK01	口金	2.4	2.3	0.6	2.2	No.10の茎にはまつた状態で出土	10
30	58	A区遺構外	鉄滓	5.1	2.8	2.5	32.5	地山上出土	18
32	78	B区遺構外	鉄滓	6.4	5.3	3.4	58.9	地山上出土	19
32	79	B区遺構外	鉄滓	6.6	3.7	2.7	42.0	地山上出土	19
32	80	B区遺構外	鉄滓	5.3	3.9	3.3	40.5	地山上出土	19
32	81	C区遺構外	鉄滓	4.1	3.4	2.7	22.1	遺物包含層中出土	19

第7表 遺物観察表 (木製品)

図版番号	遺物番号	遺構名	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考	写真図版
18	1	SA01杭A	杭	(36.3)	12.3	9.3	杭先に横位の加工痕あり。杭先長さ20.5cm	9
18	2	SA01杭B	杭	(53.6)	9.3	8.1	杭先に加工痕と擦痕あり。杭先長さ36.0cm	9
18	3	SA01杭C	杭	(36.6)	(7.4)	6.0	腐朽著しい。杭先長さ21.7cm	9
18	4	SA01杭G	杭	(51.6)	7.6	6.6	杭先に横位の加工痕あり。杭先長さ21.3cm	9
21	19	SK01	桶側板	(29.0)	9.0	2.5		11
21	20	SK01	桶側板	(18.7)	(5.6)	2.1		11
21	21	SK01	桶側板	(15.7)	(5.1)	1.1		11
21	22	SK01	桶側板	(31.1)	9.9	2.3		11
22	23	SK01	桶側板	(29.3)	9.3	2.3		11
22	24	SK01	桶側板	(30.5)	9.3	2.4		12
22	25	SK01	桶側板	(25.9)	10.4	2.5		12
23	26	SK01	桶側板	(23.7)	10.4	2.2		12
23	27	SK01	桶側板	(29.3)	10.5	2.4		12
23	28	SK01	桶側板	(21.5)	10.5	2.8		13
24	29	SK01	桶側板	(23.7)	10.5	2.3		13
24	30	SK01	桶側板	(32.6)	10.3	2.3		13
24	31	SK01	桶側板	(31.6)	11.3	2.2		13
25	32	SK01	桶側板	(26.4)	10.3	2.3		14
25	33	SK01	桶側板	(25.1)	10.1	2.4		14
25	34	SK01	桶側板	(36.7)	10.7	2.3		14
26	35	SK01	桶側板	(28.5)	10.9	2.3		14
26	36	SK01	桶側板	(26.2)	10.2	2.4		15
26	37	SK01	桶側板	(23.8)	10.7	2.2		15
27	38	SK01	桶側板	(24.6)	10.2	2.3		15
27	39	SK01	桶側板	(23.0)	10.4	2.4		15
27	40	SK01	桶側板	(26.3)	7.4	2.3	外面工具痕あり	16
27	41	SK01	桶側板	(31.2)	10.4	2.2	外面斜位に工具痕あり	16
28	42	SK01	桶側板	(17.0)	(5.4)	2.1	外面工具痕あり	16
28	43	SK01	桶側板	(18.0)	(6.5)	1.6		16
28	44	SK01	桶側板	(25.6)	10.4	1.8		17
28	45	SK01	桶側板	(20.8)	(7.1)	2.0		17
29	46	SK01	桶側板	(10.2)	(5.2)	2.2		17
29	47	SK01	桶側板	(10.0)	(7.1)	2.0		17
29	48	SK01	桶側板	(13.4)	(4.5)	2.4	表面ぼぼ剥離	17
29	49	SK01	桶底板	95.3	94.1	3.7	a~gの7枚の板を連結	17
29	49-a	SK01	桶底板	53.3	8.2	2.5	右側面(b側) 2か所に柄穴あり	17
29	49-b	SK01	桶底板	72.6	7.8	3.7	右側面(c側) 2か所に柄穴あり	17
29	49-c	SK01	桶底板	92.4	20.4	3.6	左右側面2か所づつ柄穴あり	17
29	49-d	SK01	桶底板	95.3	19.9	3.6	左右側面5か所づつ柄穴あり、左(c側)下1か所に木釘一部残存	17
29	49-e	SK01	桶底板	92.7	18.7	3.5	左側面(d側)5か所、右側面(f側)3か所に柄穴あり、右上1か所に木釘残存	17
29	49-f	SK01	桶底板	75.4	9.2	3.4	左側面(e側)3か所、右側面(g側)2か所に柄穴あり	17
29	49-g	SK01	桶底板	(52.0)	9.9	3.3	腐朽により柄穴確認できず	17
33	83	SK04	板材	30.6	(8.8)	2.7		20
33	84	SK04	棒材(杭)	(21.8)	3.2	1.5	下部先端を斜位に削り出す	20
33	85	SK04	板材	33.1	3.6	1.3	刃物による斜位の擦痕あり	20
33	86	SK04	板材	(6.0)	(10.5)	3.1	No.87と同一個体の可能性あり	20
33	87	SK04	板材	(16.1)	(13.3)	2.4	No.86と同一個体の可能性あり	20
33	88	SK04	板材	14.3	3.1	0.4	表面に加工痕、裏面に細かい擦痕あり	20

## IV 総括

### 1. 発掘調査の成果について

A区では遺物包含層の下からSA01として杭及び杭痕跡の可能性があるもの7基を確認したほか、桶を据えた土坑SK01を確認した。SK01は試掘調査時点でも確認できていたものである。遺物包含層には焼継された磁器が含まれ、焼継は19世紀から盛行するとされることから、両遺構は19世紀以前に属すると考えられる。

B区では溝2条・土坑2基・ピット4基を確認した。SD01については、盛土のためかさ上げされた現況の地盤高から約1.8mの深さまで掘削しても底面が確認できなかったが、下からの湧水も著しく危険が伴うため、掘削を中断している。SD01南側は埋蔵文化財包蔵地の範囲外となり、Ⅲ-1-(1)で述べたようにその部分は旧地形が50cmほど低くなっている。SD01が深さをこのまで延長すると、埋蔵文化財包蔵地の範囲外でも検出できる可能性がある。SD02については深さが16cmほどなので、包蔵地の範囲外では検出できないと思われる。両遺構とも17世紀後半以降に属すると考えられる。

C区では旧地形が落ちている部分（埋蔵文化財包蔵地から除外した範囲）とほぼ対応する位置に地形の落ちのラインを確認できた。また、DE区で検出した溝SD03がC区まで直線的に達しないことを明らかにでき、遺構が存在しないことが成果となった。

DE区では溝SD03と土坑SK04を確認した。両遺構は当初屈曲する1本の溝であると考え掘削していくが、調査区南壁（第17図c-c'断面）の分層をしたところ、重複する溝と土坑であることが判明した。SK04よりもSD03の方が新しい。時期を推定できる遺物は出土していないが、他の遺構の時期を勘案すると両遺構は17世紀後半～19世紀に収まると考えられる。

### 2. 東方村字西口地引番号図との対比について

越谷市には明治9年見田方村地引番号図（1989年刊行『越谷市諸家文書目録』地図の部147）が保管されているが、そこには東方村字西口つまり調査区域を含んだ地引番号図が同封されており（第35図）。以下「東方村字西口地引番号図」という、調査区域は二二五四（三）として記されている部分に該当する。ただし第35図中の点線で示した箇所に「四十一年九月有租地トナル」（点線加筆）という記載があり、これは明治41年（1908年）を示していると考えられるため、見田方村地引番号図とは異なり、作成年代は明治41年以降と考えられる。第35図を見ると、既に現在とほぼ同じ土地区割りになっている。

東方村字西口地引番号図に今回の調査平面図を合成した図が第36図である。今回の調査で得られた遺構と東方村字西口地引番号図とでは土地区割りの主軸が異なり、東方村字西口地引番号図作成時点で遺構は引き継がれていないことが分かる。前述のとおり、調査区により遺物包含層の有無はあるものの、19世紀代と思われる遺物包含層に遺構が覆われており、20世紀初頭には遺構が廃絶している、という年代観と一致する。

調査した遺構のうち、唯一地引番号図と関連のある可能性があるものとしてB区SD01が挙げられる。第35図において二二五四（一）と記載されている北側には幅を持たせた線が描かれているが、これは

大成川と呼ばれる川を指している。現在ほとんど水量がない川である。また大成川から二二五四（一）の東側を沿うように引かれた線は現存している空堀を指しており、現在もこのあたりで収束している。二二五四（一）には初代が元禄11年（1698）8月に没した清左衛門であるとされる旧家が所在しており、この空堀は屋敷の構堀の可能性がある。そうした時に、B区SD01は概ねこの堀の延長線上に位置することから、SD01は構堀で、かつては堀が少なくともB区あたりまで延長していた可能性がある。

ただし、SD01が延長していると思われるA区・C区・D区では調査対象範囲外であったり、埋蔵文化財包蔵地の範囲外であったりするため、上記の想定が正しいのかどうかは根拠に乏しく、今後調査の機会を得られた場合の課題となる。



第35図 東方村字西口地引番号図



第36図 地引番号図と調査区全体図の合成図

## 引用・参考文献

- 菟原雄大・鬼塚千花 2020 「越谷市増林中妻遺跡－市域で初めて確認された古墳時代前期の遺跡－」『埼玉考古』第55号
- 市川市教育委員会 1996 『市川市出土遺物の分析－古代の鉄・土器について－』 平成7年度市川市埋蔵文化財調査・研究報告
- 江戸遺跡研究会編 2001 『図説 江戸考古学研究辞典』 柏書房
- 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2013 『八條遺跡－中川右岸改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第407集
- 加須市教育委員会 2011 『騎西城武家屋敷跡 KB大英寺・1・2区調査－中近世編－』 加須市埋蔵文化財調査報告書第2集
- 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年』 九州近世陶磁学会10周年記念
- 越谷市 1975 『越谷市史一 通史上』 越谷市役所
- 越谷市教育委員会 1971 『見田方遺跡発掘調査報告書』
- 越谷市教育委員会 1989 『越谷市諸家文書目録』
- 越谷市教育委員会 2016 『大道遺跡発掘調査報告書 I－西大袋土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』 越谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第1集
- 越谷市教育委員会 2017 『越ヶ谷御殿跡発掘調査報告書 I－サンリットタウン越谷A・サンリットタウン越谷B 新築工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』 越谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第2集
- 越谷市教育委員会 2022 『海道西遺跡発掘調査報告書 1－分譲住宅建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』 越谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第3集
- 越谷市教育委員会 2023 『東方西口遺跡発掘調査報告書 1－大相模保育所建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』 越谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第4集
- 埼玉県・公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2022 『越谷警察署前遺跡－越谷警察署仮設庁舎建設工事（越谷警察署前遺跡（No.78-016）埋蔵文化財発掘調査業務委託）埋蔵文化財発掘調査報告書』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第478集
- 草加・八潮遺跡確認調査団 1981 『中川低地遺跡確認調査報告書』



写真3 A区全景（上が北）



写真4 B区全景（上が北・SfMにて作成）

写真図版 2



写真5 C区全景（南から）



写真6 DE区全景（上が北・SfMにて作成）

写真図版3



写真7 A区SA01完掘状況（南から）



写真8 A区SA01完掘状況（南西から）



写真9 A区SA01完掘状況（南東から）



写真10 A区SA01完掘状況（東から）



写真11 A区SA01杭A検出状況（南から）



写真12 A区SA01杭A土層断面（南から）



写真13 A区SA01杭B土層断面（南から）



写真14 A区SA01杭C土層断面（南から）

## 写真図版4



写真15 A区SA01杭D土層断面 (南から)



写真16 A区SA01杭E土層断面 (南から)



写真17 A区SA01杭F土層断面 (南から)



写真18 A区SA01杭G土層断面 (南から)



写真19 A区SK01瓦 (No.6) 出土状況 (西から)



写真20 A区SK01完掘状況 (西から)



写真21 A区SK01側板 (No.22~30) 検出状況 (南西から)



写真22 A区SK01側板 (No.26~32) 検出状況 (南西から)

写真図版5



写真23 B区調査区全景 (南西から)



写真24 B区調査区全景 (南東から)



写真25 B区SK02土層断面 (南から)



写真26 B区SK03土層断面 (東から)



写真27 B区SD01完掘状況 (南から)



写真28 B区SD01土層断面 (南から)



写真29 B区SD01完掘状況 (南西から)



写真30 B区SD01焙烙 (No.62) 出土状況 (西から)

## 写真図版6



写真31 B区SD02完掘状況（北から）



写真32 B区SD02完掘状況（東から）



写真33 B区SD02杭痕跡検出状況（西から）



写真34 B区SD02土層断面（西から）



写真35 B区P01土層断面（南西から）



写真36 B区P02土層断面（南から）



写真37 B区P03土層断面（南から）



写真38 B区P04土層断面（東から）

写真図版7



写真39 C区調査区全景 (南西から)



写真40 DE区調査区全景 (東から)



写真41 DE区SD03完掘状況 (北東から)



写真42 DE区SD03完掘状況 (南から)



写真43 DE区SK04・SD03完掘状況 (南西から)



写真44 DE区SD03完掘状況 (北西から)



写真45 DE区SK04完掘状況 (北東から)



写真46 DE区SK04・SD03土層断面 (北から)

## 写真図版8



写真47 DE区SK04土層断面 (東から)



写真48 DE区SK04木製品 (No.83) 出土状況 (北から)



写真49 DE区SK04木製品 (No.86・No.87) 出土状況 (南西から)



写真50 DE区SD03a-a'土層断面 (北東から)



写真51 DE区SK04・SD03切り合い部 (北東から)



写真52 DE区SD03b-b'土層断面 (南西から)



写真53 DE区SD03遺物 (No.95~97・99) 出土状況 (東から)

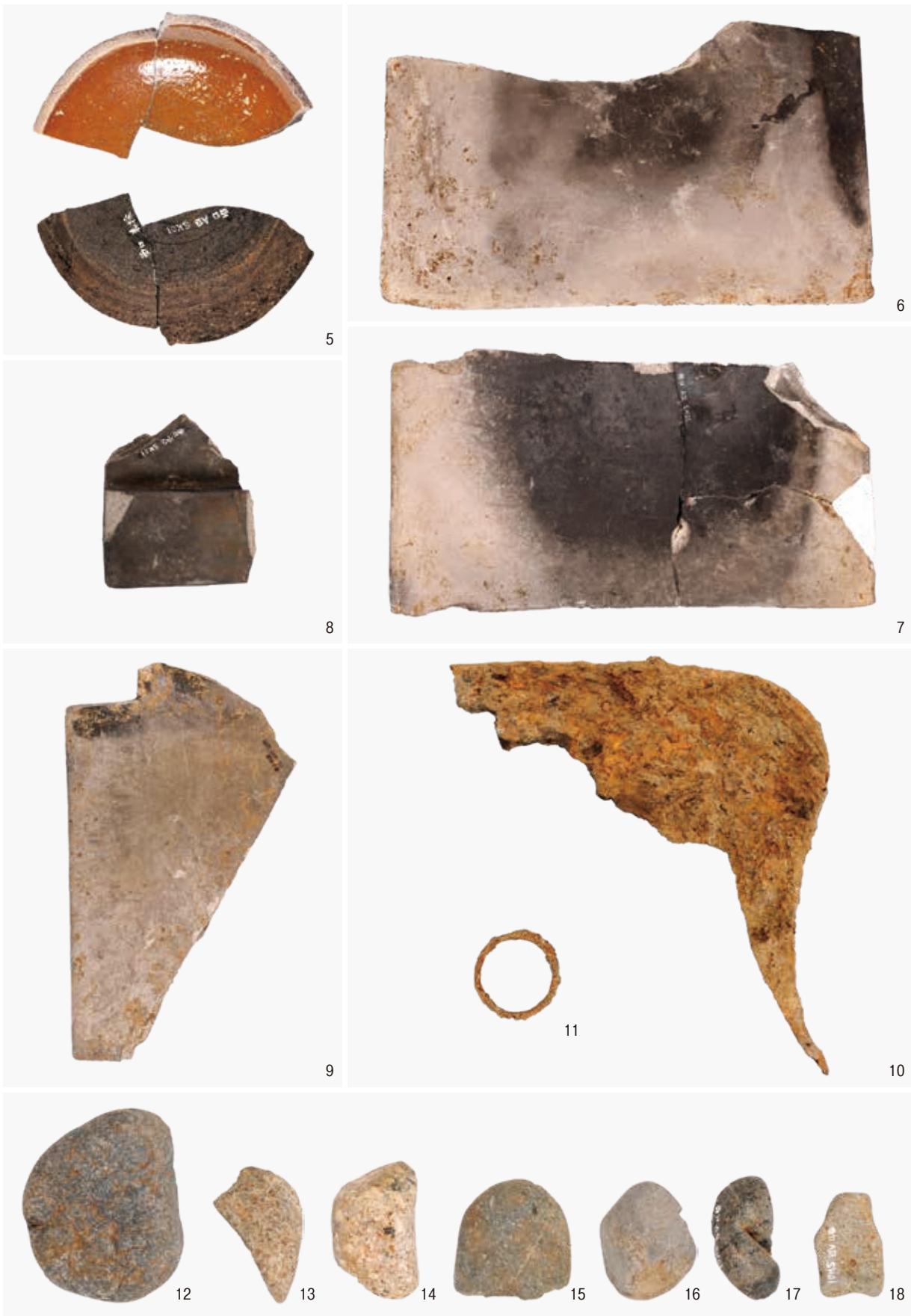


写真54 DE区作業風景 (北から)



A区 SA01 出土遺物

写真図版 10



A区 SK01 出土遺物 1



A区 SK01 出土遺物2

写真図版 12



A区 SK01 出土遺物3



28

29



30

31

写真図版 14



A区 SK01 出土遺物 5



36



37



38



39

A区 SK01 出土遺物6

写真図版 16



40

41

42

43

A区 SK01 出土遺物 7



A区 SK01 出土遺物8

写真図版 18



A区遺構外・B区 SD01 出土遺物



B区 SD01・SD02・遺構外・C区遺構外・DE区 SD03出土遺物

写真図版 20



DE区 SK04出土遺物

写真図版21



DE区SD03・遺構外出土遺物

写真図版22



市指定文化財・承応2年庚申塔

## 報告書抄録

ふりがな	にしごちいせきはっくつちょうさほうこくしょ1
書名	西口遺跡発掘調査報告書1
副書名	個人住宅建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
卷次	一
シリーズ名	越谷市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第5集
編著者名	菟原雄大・鬼塚千花・安井陽子
編集機関	越谷市教育委員会
所在地	〒343-8501 埼玉県越谷市越ヶ谷四丁目2番1号 TEL 048(964)2111
発行年月日	西暦2025年(令和7年)3月31日

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
にしごちいせき 西口遺跡 A区	さいたまけんこしがや し たいせい 埼玉県越谷市大成 ちょう 町一丁目 2254番 9・14	11222	78-002	35° 53' 25"	139° 49' 13"	20230526 ～ 20230607	60	個人住宅 建設
にしごちいせき 西口遺跡 B区	さいたまけんこしがや し たいせい 埼玉県越谷市大成 ちょう 町一丁目 2254番 10	11222	78-002	35° 53' 25"	139° 49' 13"	20230605 ～ 20230614	50	個人住宅 建設
にしごちいせき 西口遺跡 C区	さいたまけんこしがや し たいせい 埼玉県越谷市大成 ちょう 町一丁目 2254番 11	11222	78-002	35° 53' 25"	139° 49' 13"	20230522 ～ 20230530	10	個人住宅 建設
にしごちいせき 西口遺跡 D E区	さいたまけんこしがや し たいせい 埼玉県越谷市大成 ちょう 町一丁目 2254番 12・13	11222	78-002	35° 53' 25"	139° 49' 13"	20230616 ～ 20230630	95	個人住宅 建設

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
にしごちいせき 西口遺跡	集落跡	平安時代 江戸時代	土坑 溝 ピット 杭	4基 3条 4基 4本	土師器、須恵器、近世陶 磁器、瓦、木製品(桶底・ 桶側板)、鉄製品(鎌)	西口遺跡における初の発 掘調査。 平安時代の散布地。 近世遺構を調査。

要約	西口遺跡は元荒川の右岸に立地する奈良時代・平安時代・近世の遺跡である。今回の調査では平安時代についての遺構は確認されず、近世遺構に平安時代の遺物が流れ込んでいた。近世遺構としては柵列、桶を据えた土坑、溝、土坑、ピットが確認された。近代の地図と比較すると、近代にはそれらの遺構は継続していないことが分かる。唯一B区SD01とした溝は、初代が元禄11年(1698)8月に没した清左衛門であるとされる旧家の構堀の延長部に相当する可能性があり、近世の土地利用状況を示す事例となった。
----	---

越谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第5集

## 西口遺跡発掘調査報告書1

－個人住宅建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－

発 行 越谷市教育委員会  
埼玉県越谷市越ヶ谷四丁目2番1号  
電話 048（964）2111  
発行日 令和7年3月31日  
印 刷 株式会社 秀飯舎